

## 第4回高等学校改革プラン推進委員会（第四推進委員会）議事録

1 日時 平成17年7月27日（水）午後1時30分～午後4時30分

2 場所 松本市総合社会福祉センター 4階中会議室

3 出席委員

|           |         |
|-----------|---------|
| 中條 利治委員長  | 小山 勉委員  |
| 百瀬 哲夫副委員長 | 下川 隆委員  |
| 小口 利幸委員   | 藤本 光世委員 |
| 小林 進委員    | 長谷川 功委員 |
| 今井 隆一委員   | 鈴木 義明委員 |
| 野口 廣子委員   |         |

### 4 開会

（西牧主任教育支援主事）

本日は、お忙しい中、お集まりいただきまして、誠にありがとうございます。  
それでは委員長さん、よろしくお願いします。

（中條委員長）

改めまして、お忙しい中、また、今日も暑いわけですが、お集まりいただきまして、ありがとうございます。

今日は、特に、初めての平日開催ということで、本来業務を何とかご都合つけていただいてご出席いただいたということで、おわび方々お礼申し上げます。

まだお見えになっていない委員の方もいらっしゃると思いますが、今日は、14名中11名の委員の方々の出席ということで、第4通学区、第4回の推進委員会を進めてまいりたいと存じます。よろしくお願いいたします。

早速ですが一応最初に、前回の第3回推進委員会の確認を、個人的なメモで恐縮ですが、させていただいて、そのあと、第3回推進委員会以降の他の推進委員会の動きを、県の教育委員会のほうからご報告いただき、お手元にあります資料のご説明という順番で進めさせていただきます。よろしくお願いいたします。

それでは、早速ですが、駆け足で、前回、第3回推進委員会の議論を振り返りたいと思います。

前回は、最初に県会および県の文教委員会の審議内容ということで、事務局から報告をいただきました。1点、少人数学級論議については、小中学校は義務教育で2分の1が国庫負担、残りを県の支出で賄っているのに対し、高校については、学級数の地方交付税の計算基礎には含まれるけれども、すべて県費で賄っていると。

それから、富山県うんぬんというやりとりがあったそうですが、これについては、募集充足率が100%であるが、これは不足を生じた場合、長野県のように公立学校の再募集をせず、強制的に募集定員を削減して、オーバー分を私立に回している結果であると。その結果として、少人数学級が生まれたが、小規模化を加速させることになって、むしろ県と

しての再編はこれからであると。

ただし、富山県の場合は、すでに先行して総合学科、それから多部制を設置済みであるので、再編という意味での具体案でのこれからの検討が難しそうだというようなコメントをいただいています。

それから、高校改革の審議日程に関しての報告の中で、平成 18 年からの実施の報道があるが、激変緩和が必要ではというご意見をいただきました。それに対して、ある程度の計画・目標をもって進めたいということであり、現状は、年度内に実施計画を策定し、平成 18 年度から実施するということであり、従って、平成 18 年ではなくて、平成 19 年の新入生からがその対象となるというご説明でした。

それから、改革プランの審議プロセスのご説明の中で、ご意見・ご質問がありまして、審議内容そのものは県会の議決対象ではないが、その結果、条例改正が必要となる場合、また、改革に伴う費用を含めた予算審議は県議会での承認が必要であると。

資料説明の中で、全国募集について現在は飯山南の体育科だけになりますが、一家定住要件を緩和して、強く希望し、入寮可能な場合は認めるとしている。以前、県教委では否定的であったという意見がございましたが、これについては、限定された学校が全国募集するということは考えられると。これも一応、交付税の計算基礎にも入りますということでした。現在の全国募集は、飯山南の体育科のみということで、当初種目はスキーだけであったが、定員が埋まらず、その後、多種目にも拡大したということで、ほかの種目の状況はどうかということで、今日の資料を提示要求がされております。

その後、「魅力づけ」という中で、「地域教育プラットフォームについて」という議論をしました。その中の代表的な意見になりますが、地域の基盤として取り組みが必要であるという意見。それから、一町村では限界があり、広域、例えば郡全体の取り組みが必要であるという意見です。高校だけでなく、小・中・高が連携した取り組みにより、小規模化の弊害を埋めるような取り組みが必要である。事例として、過疎地域によっては、専科の教員がいらっしゃらず、そういうことが学力低下や学科嫌いの原因にもなりかねない。中・高で掛け持ちしてもらような取り組みが必要ではないか。その一方で、掛け持ちをした場合、どうしても生徒との関係が希薄になるという弊害もあるというご意見がありました。そうした先生が足りないのであれば、逆に統合して、数を増やして、教育の質を上げたらどうかというご意見もありました。

それから、越県については、栄村秋山郷などは、交通のアクセス上新潟に出ざるを得ない地区もあり、お互い協定を結んで越県通学を認めている。宮川委員から、南木曽町の現状として、岐阜から 60 名、岐阜へは 40 名というご説明がありました。

中高一貫については、連携校を前提に大町高校と仁科台中で研究をしたが、通学区見直しの検討の中で具体化には至らなかった。この改革プラン検討の中で、改めて検討してほしい。

それから、木曽地域については、県立の林業大学校や技術専門校もありながら、これまでほとんど連携がなかったが、今後は少しずつ取り組みが必要であるということ。

全国の水産学校では、産学連携でのネットワークが進められ、漁業関係の雇用創出、もしくは水産大学校への進学との取り組みがされており、参考にすべきであるということ。

また英語やエンジニアリングなど、地域にもトップレベルの人材がおり、そうした地域

人材を生かすべきであるということ。プラットフォームは、人材ネットワークであると。

さらに、これまでもOBの活用など、プラットフォーム的な取り組みを個別で行ってきたが、どうしてもスポットで連続性を保てず、プラットフォームは「魅力づけ」の主にはなり得ない。やはり、高校そのものの魅力が重要であるというご意見。

それから、「魅力づけ」について、第4通学区としての「魅力づけ」という議論の中では、魅力を考えると、どうしても規模に帰結をしてしまう。生徒間のぶつかり合いが必要だという事例を挙げられてということでした。

地域校では、都市部からの不本意入学ではなく、地元占有率をいかに高めるかが重要である。魅力とは、自分の学校に誇りを持てるかであり、生徒やOB、父兄の声も聞く必要がある。

それから、小規模校でも、きめ細かな指導等の魅力はあるのではないかとご意見。

また、規模や数の議論ではなく、地域の学科ニーズ、子どもたちがどの学科に進みたいかをまず確認し、そのニーズに今の学科や学級数が合致しているのか、その上での学校の数や、学科、学級数を議論すべきではないかとご意見。

さらに、地域の将来を見据えた教育、学校が必要で、例えば地元出身の教員が少ないのでそれを確保すべく、例えば信大教育学部への進学者を増やす等の将来を見据えた取り組みが必要であるというご意見等が出されています。

今回になります、教育委員会のほうへお願いをした資料ですが、今ご意見がありました学科進学ニーズの実態調査、平成15年に県民アンケートがされているというご説明があって、その中でそういったものがあれば紹介してほしいというご希望。それから、先ほどの飯山南の体育科の種目別の人員。それから、白馬高校の中高一貫の取り組み事例が、もしあればということ。それから、木曽山林の林業関係の後継者育成の取り組み、連携等の事例があれば、やはり紹介をしてほしいということが、前回から今回に向けての要求資料ということでした。

今回については、具体的個別の「魅力づけ」議論をさらに継続をするということで確認をいただいております。

それから、ご紹介をしておきますが、今日始まる前に、「木曽高校の存続を願う」ということでの要請書を、18,408名でしたでしょうか、署名をいただきましたので、代表してお預かりをしております。

同じく、7月16日に、木曽高校の文化祭に合わせたシンポジウムがありまして、代表して参加してきました。議論、それから方向うんぬんは申し上げませんが、感じたことだけご紹介をしておきます。

生徒さんたちは、最初に、司会の方が、「最初から反対という意見は一切受け付けません」ということを申し上げられて、具体的にどうしたらいいか、「魅力づけをどうしたらいいか」という議論を進められました。最後に、生徒会長の方が、締めくくりも含めてお話しになったのは、「再編案が提示され、かつ木曽高校という名前が統合対象として挙がったことには、非常に憤りを感じます。ただ、これをきっかけに、契機として、我々自身が『魅力づけ』を一生懸命考える機会になったことについては、素直に感謝をしたい。『魅力づけ』を、今後検討していきたい」という言葉が、個人的には非常に印象的でした。

そういう意味で、我々も、生徒さんたちの純粋な気持ちを踏まえて、きちんとした議論

を進めていきたいと思います。よろしくお願いいたします。

それでは、前回、第3回以降の状況について、事務局のほうからご説明をいただけたらと存じます。では、米澤次長さん、お願いします。

## 5. 資料説明

(米澤教育次長)

本日は、ご苦労さまでございます。

それでは、私、米澤のほうから、話をさせていただきたいと思います。

第4回の推進委員会が、第一、二、三通学区ではすでに終了しておりますので、それぞれ日程の順にご説明申し上げたいと思います。

7月20日(水)に、第三推進委員会が飯田高校で行われました。この日は、会議を1時間ほどということに絞って、私どもの資料説明をさせていただき、また質疑をして、その後学校視察ということで、飯田高校、松川高校、飯田工業の3校の視察をさせていただきました。

その質疑では、部会の設置についての話が出ました。部会を設置し、地域の意見を聞くことが必要ではないかという意見がある一方、推進委員は利益代表ではなく、地域エゴを反映することはできないということで、部会の設置には反対という意見もございました。この日は、これについて、一応ペンディング(留保)ということで後日改めて議論することになっております。

学校視察は、先ほど申し上げた3校ですが、飯田高校の授業も見させていただきながら、その後、松川、飯田工業の2校に回らせていただいたわけでございます。

7月24日に、第二推進委員会が野沢会館で行われました。ここでは、主に「魅力ある学校づくり」ということで審議を進めさせていただきました。外国籍の生徒の受け入れについてや、公設民営などの特区を活用した新たな学校というような話も出ました。それから、学校の裁量権の拡大についての話が出ました。多部制・単位制と定時制ということについても話が出まして、現在、定時制に通っている生徒も、通いたいと思っている生徒は多いのではないかなという意見や、多部制・単位制のニーズは高いというような話が出たわけであります。また、再編整備にかかわりまして、佐久地域と上小地域の生徒の減少率のバランスのことについても話題が出ました。

7月25日(月)に、第一推進委員会が県庁でございました。主に「魅力ある学校づくり」ということで審議をしていただきました。「魅力」ということのとらえ方について、これは、多部制・単位制、総合学科というようなシステムとして考えていくことが必要ではないかという意見がございました。また、魅力をつくっていく上には、一定程度の規模は必要だという意見がございまして、少人数学習集団を形成していく上でも、一定程度の規模がないと、教員配置等の問題から、習熟度学習、あるいは選択科目の設定などの可能性が狭まってしまうのではないかなという意見が出ました。また、公設民営など、学校の運営方法の形態というようなことについても、話題が出たところでございました。

以上、第一、二、三とそれぞれの推進委員会の、第4回目の状況をご説明させていただきました。

ありがとうございました。

(中條委員長)

ありがとうございました。

今の米澤次長さんのご説明に対して、何かご質問はございますか。

よろしいでしょうか。

それでは、早速ですが、本日の資料、我々が要求したもの、それから今ご説明いただいた第1、第2、第3の各通学区推進委員会でこれまでに説明された資料を、合わせてご説明をいただきますが、参考資料を合わせると12ということで、非常に多いので、ポイントだけ簡潔にご説明をいただいて、あと議論のほうで必要なものを、改めてご質問等を踏まえてご説明するというところでお願いをしたいと思います。

それから、我々第4通学区推進委員会で前回お願いをした資料については、多少詳しくご説明いただければとお願いいたします。

高校教育課西牧主任教育支援主事から資料説明(説明内容省略)

## 6 議事

(中條委員長)

ありがとうございました。

それでは、資料が非常に多かったので、駆け足でのご説明になりましたが、配布資料またはご説明いただいた内容で、先に質問等があればお願いしたいと思いますけれども、何かございますか。よろしいですか。

1点資料についての質問ですが、資料1では中学3年生が2,758人、資料2では中学2年生4,182人ということで、かなり対象の数が違うのですが、学年でこんなに減らないですよ。何か対象などが違うのでしょうか。

(柳澤教育主幹)

特に人数的には、意図的に差を出しているということではないのですが、例えば3年生のアンケートですと、2,800名程度の生徒を対象に行ったのですが、ある程度の地域バランスですとか、学校の規模のバランスを考慮した上で抽出して行った数です。

(中條委員長)

そうですか。分かりました。

ほかに何かご質問がございますか。

(長谷川委員)

資料5の「農業高校生に対する就農に関する意識調査」というところで、3番の農業高校入学動機で、「その他」が一番多く3分の2となっていますが、具体的にどんなことが「その他」で挙がっているのかということを紹介してもらいたい。

(柳澤教育主幹)

詳細な点は分かりかねます。資料に記載してございます「担い手基金」が中心になって、毎年これを実施しておりまして、そちらから資料を提供いただいたわけでございます。

入学動機として、「農業をしたいから」「農業をするため」「理科系が好きだから」という選択項目以外に、そこに収まらないいろんなことが考えられますが、今手元に関連する資料がございませんので申し訳ございませんが詳細については分かりかねます。

(中條委員長)

いずれにしても、ほかの通学区の希望、要望に対して、それに沿うものを、県教委のアンケートでなくて、ここにある育成基金から取り寄せていただいて紹介いただいているという理解でよろしいんですね。

長谷川委員、それでよろしいでしょうか。

ご質問等ほかにございますか。

それから、中学3年と中学2年を対象にした希望調査ですが、これは定期的にやってらっしゃるのでしょうか。もしくは、何年に一度とかいうアンケートなのでしょうか。

お願いします。

(吉江高校教育課長)

平成15年度に、この高校改革プランの検討事業を立ち上げた折りに、ワーキングでいろいろな中学生の動向を調査したいということで実施しまして、実は過去引き続いて何年かごとにやっているとか、あるいは今後その予定をしているというような性格のものではございません。

(中條委員長)

では、アンケート目的は、高校改革プラン検討委員会の検討に処するという前提になるわけですか。ありがとうございました。

ほかはよろしいでしょうか。

それでは、前回、「地域教育プラットフォーム」、それから個別ではなくて、まず第4通学区としての「魅力づけ」ということで議論をしたのですが、終わってからの反省を踏まえていうと、やや抽象的で、行きつ戻りつという気がしております。できれば、何かしらの成果をこの3時間の中でということを経験に、具体的な個別論議に入っていきたいと思っておりますので、よろしくお願いします。

それでは、前回といたしますが、これまでのことも踏まえてになりますけれども、前回、「地域教育プラットフォーム」もしくは通学区全体というような形の「魅力づけ」でしたが、一応『最終報告』案でも、例えば総合学科、それから多部制・単位制というのももちろんですが、例えば地域連携校ですとか、ジョイント校、それから具体的なその取り組み事例としては蘇南ということになりますけれども、総合選択とかミニ総合学科的といったほうがイメージが合っているのかもしれませんが、そんな取り組みも具体的にされているというようなことの中で、先ほどの幾つか『報告書』の提案、プラスそのミニ総合学科的な取り組みについて、具体的な提案など、ぜひ個別の議論をしていきたいと思います。

仮に、ある地域を前提にした議論が必要であれば、それはそれで、この中で議論をしていきたいと思いますのでよろしくお願いします。

また、それ以外の個別の「魅力づけ」についても、何かご意見があれば、ぜひ出していただきたいと思います。

さらに、第4通学区だけになりますけれども、委員の方々には第4通学区全高等学校の「魅力づけ」の取り組みについて、同一項目、「その他」も入れて7項目を、第4通学区内の全高校から取り寄せていただいていますので、個別具体的な各高校の取り組み事例も参考にさせていただきながら議論をしたいと思います。

特にこの資料について事務局からのご説明はよろしいですね。

それでは、何かご意見があれば伺ってと思います。よろしくお願いします。

なければ、私の方から、多少過激な投げかけを含めて、それに対する批判で結構ですけれども、ご質問をさせていただきます。

地域連携校ということで、これは各高校が個別に、統合ではなく、それぞれ存在する中で、いかに連携を深めるかということだと思うのですが、蘇南は専科の先生が少ないとかいう中で、県教委のほうにご質問をしたほうがいいのかもしれませんが、例えばですけれども、岐阜県中津川市との連携なんていうのは可能性があるんでしょうか。

県教委のほうがよろしければ、どなたか。無理なら、無理だということで結構ですが。

（吉江高校教育課長）

地域連携がらみで、例えば、中学校と高校との先生の相互交流というような選択肢はあろうかと思うのですが、両方の免許を持たれている先生もいらっしゃいますので、そういう選択肢はあろうかと思っていますが、例えば今のお話にございましたように、県境を越えると岐阜県立中津高校がありますが、この中津高校との可能性はというお話になりますと、可能性がないとは言い難いのでしょうか、ただ現実的には、どうしても教育委員会が変わってしまいますし、その中で扱う教科書等いろいろな問題もございますものですから、現実的には難しいのではないかと思います。

（中條委員長）

そうすると、蘇南ということではないのですが、地域連携というのはあくまで長野県内の、県の教育委員会管轄の高校内での近間ということになるかと思いますけれど、連携ということが前提になると。

特に、20数校全部の関係者がいらっしゃらないので、どうしても具体的高校名でご質問するしか具体例がないので申し訳ないのですが、将来的な生徒数の減少予測から規模的なところも予測される中で、例えば蘇南や白馬について、将来的にクラス数、それから学生数を見ても、どうしても、ミニ総合学科というのはちょっと別にしまして、地域連携校という意味での何か希望やアイデアなど、もしご意見があれば、鈴木委員なり、下川委員なり、どちらかでも結構ですのでお願いをしたいと思います。

(鈴木委員)

前回は触れたようなお話になってしまうかなと思うのですが、前回の資料で、本校の総合選択制についての資料が出たのですが、必ずしもうまくいっていないという状況があるんです。というのは、普通科、商業科、電気科がありますが、職員配置の現状が、商業科の教員が3人、電気科の教員が4人なのですね。従って、持ち時間などを考えると、階段をきっちりと同じ単位数で専門学科の授業をやって、あとのところは乗り入れというような形をつけづらい状況もあって、その辺のところクリアできれば、さらに良い総合選択制ができるかなと思うのです。

そのためには人がほしいのですが、小さいから十分にいなかったり、特に芸術科の先生については、木曽のような地域だとなかなか非常勤で来ていただける人もいないという状況があるのです。先ほど出た兼務というの難しい状況もあったりして、それぞれ一名ずつ確保して、芸術科の授業を確保しているというようなこともきっとあるんだろうと思うのですが、教科によって、0.75人とか0.5人というような刻みの教員というのは取りづらいという状況があって、そんな実態があるんです。

そうなれば、例えば、芸術科なら芸術科、あるいは家庭科なら家庭科を中学校とうまく連携を取りながら、より合理的な配置にする中で、全体的に、それも今の具体例でいえば、商業科が3人しかいないところを4人確保していくというようなことで、中高の連携ということができれば、高校としてはありがたいし、前回話をしたことと言えば、中学校に、もし英語とか数学とか専科の先生がいらないようであれば、また時間が足りないという状況があれば、高校から行って援助をしながらというような、うまくトータルとして地域として一つの規模を確保するという、中高として一つの規模を確保するという形というのは、私は個人的にはそれもいいなというように考えています。

(中條委員長)

はい、ありがとうございます。

蘇南高校の取り組みは、参考資料の一番初めの学校ナンバー70に記載されていますので、それも参考にいただきながら、白馬高校は一番後ですね。最後から2ページが白馬高校になりますけれども、下川委員のほうで、今と同じご質問なんですが、もし何かございましたら、ぜひお願いします。

(下川委員)

取り組みとしての中高一貫連携というものについては、具体的に方向性を打ち出しているわけではないのですが、今までの流れとして、儀式的な会議であったり、同じ器の中で同じ関係者が議論していても、やはり抽象的なものになってしまうということで、この第四推進委員会の進め方と同じく、具体的に一歩踏み込んだ方向性を生み出していくという位置までは、中高連携という形で、今議論をしております。

先ほど鈴木先生のお話もありましたけれども、中高連携という部分になりますと、やはり現場の先生方の数、それから余裕があるかということが、やはり対象になってくると思いますので、今後、小中高も含めた中で、これについては取り組んでいくということで進めているところであります。



具体的には、前回も申し上げましたが、白馬地区の魅力としてスキーというものがあるのですが、これは実際に小中高も含めた中で、スキークラブを中心とした連携を取っておりますので、これを拡大した形の中で、一般の取り組みについても展開していけばいいのではないかと、今、議論の最中です。

（中條委員長）

最初から、中高という前提で、今お話をいただいたのですが、高校間の連携という観点からは、例えば、大町地区でいうと大町と大町北、白馬などありますが、何かニーズなどございますか。

（下川委員）

これは1校だけのことではないと思います。大北4校ある中で、また今後そういう形で組み合わせができるかどうかということは、1校だけの議論ではなくて、また広域の中で進めていく必要もあるかと思います。独自では、特には今ないです。

（中條委員長）

ああ、そうですか。

それでは、私が知らないだけかもしれませんが、一応、蘇南は普通科、商業科、電気科という3クラス編成なのですが、白馬高校の場合は、どういう学科編成になっているのでしょうか。何クラスで、どういう学科があるか。

（下川委員）

今の1年生は69名の入学者で、2学級です。インナーコース制を導入したのは、平成11年からということになりますけれども、文理コース、それからアルプスコースという2コースに分かれております。

文理コースについては、基本的に進学コースという設定ですが、これについても進学希望という保護者の方の希望が圧倒的に強くて、具体的に今後どういう形で進学に対する取り組みをしていくかということが、1つの課題となっていると思います。

それから、学校ごとの特色を記載した資料の89番のところを見ていただければ分かると思うのですが、アルプスコースというのは、地域と連携を持った取り組みをしていくというコースなんですけれども、抱えている一番の悩みというのは、学力差が非常に大きいという点です。これについては、少人数できめ細やかな教育をしていくという学校の方向性もあるのですが、学力差というものについては、単に高校に入った時点だけの問題ではなくて、非常に根が深い部分があるので、これについても中高の連携という中で情報交換をしながら、いろいろ取り組んでいく必要があるのではないかなというように思っています。

（中條委員長）

先ほど、蘇南というより、前は木曽エリアでということで、特に、例えば専科というのでしょうか、例えば英語ですとか、それから先程の鈴木委員がおっしゃった、例えば音楽ですとかというところで、なかなか先生がいらっしゃらなくて、例えば高校間なり、特

に文理コースですね。それから芸術の場合は中高になるのかもしれませんが、白馬の場合は、今のところ充足されていて、そういうニーズは特にないというという理解でよろしいのですか。

（下川委員）

具体的に、現場の先生方の立場というか負担というのはどのようなのか分かりませんが、特に際だったものというのではないと思いますが。

（中條委員長）

P T Aとしては、今のところは特に認識されていないのですか。

（下川委員）

はい。

（中條委員長）

すみません。特に、県教委のほうで、白馬高校でそうした専科の教員の不足というようなことを聞いていらっしゃるようなことがございますか。

（吉江高校教育課長）

白馬高校の場合、ほかにも一般的にはそういうことになると思うのですが、基本的には充足しているというようなことで私どもは理解しております。

それから、先ほど下川委員さんがおっしゃいましたが、白馬は、いわゆるコース制を敷いておりますけれども、学科という位置付けですと、普通科というような位置付けになるものですから、学科としては一つの扱いになります。

（中條委員長）

では、この教育課程の中で、取り組みとして書いていただいている環境・観光・アルプス研究も、学科としての扱いは普通科で全体で2コース。

小規模校だけではなくて、例えば都市部等も含めて、高校間連携、もしかしたら中高のほうでニーズが高いのかもしれませんが一旦それは置いておきまして、高校間連携というところで、具体的な何かアイデアなりニーズなりをお持ちであればという意味で、藤本委員、何かございますか。

（藤本委員）

今のところ具体的にはないと思います。

（中條委員長）

そうすると、連携校ということで、仮に具体化をしようとする、中高連携、小も入っているのかもしれませんが、小中高ですかね。中高という意味で考えたときに、先ほど地域ニーズというものは、鈴木委員なり下川委員からはご説明いただきまして、それがすべ

てかどうかは別にして、何点かご説明いただいたと思いますが、都市部での連携校での中高というニーズが、もしくは具体的な取り組みとしてはあり得ますでしょうか。

中高の立場で、長谷川委員、何かアイデアがあればお願いします。

（長谷川委員）

そうですね。塩尻志学館高と武蔵工大二高が連携をして、例えば工業科に入った生徒が、もう少し手広くいろんなことを勉強したいというときに連携をしているというのが、塩尻のほうではある例だと思うのですが。

ちょっと、これぐらいしか分からないですね。

（中條委員長）

中学と高校との連携という観点で、例えば長谷川委員の立場で、仮に勤務されている学校単独のことで構わないのですが、何か可能性ありますか。

（長谷川委員）

たぶん、学校同士の連携というようになってくると、かえって可能性は少ないのではないかなと思うのですが。ほんとうにすごく限られたところで、松本で言えば、例えば、昨日もたまたまあったのですが、「サイトウ・キネン」があるから、じゃあ音楽について充実させようということで、例えば音楽関係のことを高校と一緒にということは、ぽつとあるかもしれないのですが、カリキュラム全体を通して、そこで連携を通したりとか、学校同士でということとはあまり考えづらいかなと思います。

（中條委員長）

検討委員会の『最終報告書』にストレートに書いてあることをご質問しているわけではないのですが、『最終報告』の11ページに、「連携型県立高校」ということで幾つか、これも具体化というよりは、まだアイデアベースで、どういう形になればどうなのかということは何も書かれていないと思いますが、書かれていることをベースに、少なくとも第4通学区として何か可能性があるのかどうかという意味なのだと思います。

ここに「連携型県立高校」と書いてありますけれども、仮にA校、B校があった場合、連携すると、それはC校になるのか、それとも、A校、B校がただ、授業、先生とか、ネットワークでも何でもいいんですけどもやって、A校、B校はそのままという意味でここは理解したほうがいいのでしょうか。

（柳澤教育主幹）

『最終報告』にございます「連携型県立高校」のイメージとしては、いろんなことのバリエーションが考えられると思いますが、基本的には、それぞれの学校が独立した高校として存在しながら連携をしていくというようなイメージでございます。

その同じページに「ジョイント高校」というような表現がございましたけれども、この場合は「近接する複数の学校が校地を維持したまま統合し」ということで、こちらの場合は、校舎は複数でも学校は一つであるというイメージでございます。

なお、高校間連携につきましては、現在の取り組み状況ですが、今3組6校で、違うそれぞれの学校に生徒が行って単位を取るというような方法で、北のほうでは須坂園芸と須坂商業、南のほうでは下伊那農業と長姫高校、それから東のほうでは岩村田高校と北佐久農業高校が、非常に近い距離にございますので、生徒が移動して授業を受けて、そしてこちらの学校で単位をとるというようなことが行われておりますが。

（中條委員長）

「連携型県立高校」は、それぞれが個別高校として存続しながら、単位の融通という言い方が当たるかどうか分かりませんが、ほかの学校で勉強したことも単位として認められるというような扱いで、それに対してジョイント校は、近距離、隣接する学校が、物理的な場所は別々で維持しながら、統合するとか移動するとかといったようなことを想定する学校の形態だということなのだと思います。

これに対して、具体的なご意見等がもしあれば、ですがいかがでしょうか。

（下川委員）

ちょっとまた、はズれるかもしれないのですが、身近なところで様子を見てみたんですけども、中高一貫、それから中高連携とそれぞれの考え方があると思うのですが、自分のうちの近くでも、中高一貫である長野日大高へ白馬から長野までバスで1時間かけて兄弟で通っているというケースもありますし、なぜ行くかということ聞いてみると、やはり親の安心感というものがあるというように聞いています。

同じく佐久長聖などでも、全寮制で親元を離れて進学しているケースもありますし、松商学園も来年度からそういう動きがあるというように聞いております。やはり、高校の「魅力づくり」を進める一方で、中学離れということも現実これから出てくる可能性もあるので、そういうことも県立、私学も含めた中で見守っていかなければいけないのではないかなというように思います。

（中條委員長）

今、下川委員がおっしゃられた中学離れというのは、中高一貫形態の中学に地元から行ってしまうので、地元の中学から離れてしまうという意味ですか。

（下川委員）

そういうケースもあり得るという話です。

（中條委員長）

私がずっとしゃべってはいけないのですが、黙っていてもしょうがないので。ご意見がなければ。

いただいた資料6があります。これを見ると、かなり細かく見ていったほうがいいと思うのですが。例えば、第4通学区という意味では旧になってしまいますけれども、旧通学区で、第11通学区は松本エリアでいいですね、松塩というか。ここは、第12通学区の大町、大北地区のほうに110名行っているんですね。また、第7通学区、新でいう第3通

学区の諏訪、岡谷に182名が通っている。それから、我々の第4通学区というブロックで見ると、第12通学区は、大町から白馬、小谷までですが、第11通学区の松塩エリアに、私立まで入れると242名が通っていらっしゃる。そこに、第11通学区からも111名来ますので、差し引きすると130名程度が流出という形になってしまいます。だからどうかということ、あえて言いませんが、事実としてはそういうことだということです。

先ほど下川委員のほうから、中高一貫という意味での中学離れというお話もあったのですが、地元中学から、せっかく今で言えば旧第12通学区の中に当然高校もありながら、この高校かが分かりませんけれども、他地区の高校へ行っている。

ちょっとこれを事前に確認をさせていただきましたが、この場で個々に見ていく必要があれば見ますが、いったんは紹介だけで。各学校要覧に、それぞれ高校別に、どの中学から、学年ごとに何名ずつ来ているのかというのがあるので、調べようと思えば当然調べられますけれど、一応そんな状況ということで。これは、他の通学区で同じような資料提示を求められて、それに合わせて、我々の第4通学区に合わせて作成いただいた資料ということになりますけれども、一応はそんな状況です。

付け加えますと、第10通学区の木曽地域は、0ではありませんけれども、ほとんどが第10通学区内にとどまっています、一番近い圏でいけば塩尻になりますけれども、第11通学区へは私立を含めて37名ですかね。「しか」という言い方が当たるかどうかですけれども、比率的には非常に少ない。

ほかのブロックではなくて、第4通学区という、現状の第10、第11、第12という学区で見ても、そのような状況があるということだと思います。

今申し上げた以上の説明は、特に県教委からはないですね。現時点では。

この辺も含めて、せっかく中学校名が全部出ているのですけれども、例えば、全部が1校ではなくて、第10通学区でいうと12、13校の中学がある中で、南木曽エリアと、それから木曽福島という近いエリアと分けたときには、たぶん、5校とか10校未満の中学が対象になると思いますけれども、半分以上が違う学区に行ってしまうとともかく、ほとんどがここにとどまるという意味では、6年制がいいかどうか分かりませんけれども、中高の取り組みの可能性もあるんじゃないかなと思って見ているのですけれども。

木曽エリアだけに集中しての議論は本意ではありませんので、中高一貫ということでの、何かご意見等があれば。

(今井委員)

よろしいですか。

中高一貫ということで、結構、東京などでは中高一貫高校が出てきます。ただ違うのは、その上に必ず大学がついているんですね。中学、高校、大学というエスカレーター方式の中高一貫という部分がクローズアップされているというような感じだと思うんですね。

では、長野県では、公立高校で中高一貫というようなことを進めていくかと。例えば、今のあまり具体名を挙げるべきではないのかもしれませんが、木曽の中で中高一貫高校を2つぐらいつくって、だいたいみんながその線で高校まで同じところを出て行くというようなところで考えるのは、ちょっと申し訳ないのですが、それってすごく、反面怖いことだなと思う気がします。やはり、中学のときの関係が、そのまま高校まで上がって

行ってしまうというのは、中学から高校にかけてというのは、高校生ってものすごく人生の中でも変化の激しい世代だと思うんですね。そこが、中学、高校と同じ集団の中で行っちゃうのかなというのは、自分の経験からしても、あまりありがたくないなと。やはり、中学は中学。中学は義務教育で、住所地に縛り付けられているというところでは、小学校、中学というのはしょうがないかなという感じはしているのですけれども、せめて高校ぐらいは、自分の意志を生かしたようなところで、ある程度の学校を選択するということのほうが、私は一人の人生を設計する上においてはいいのではないかなという感じがしているのですね。

その上に、例えば、私立などでやっている小、中、高、大学まで、ほとんど全部自分のところで賄えるよという、それはそれで高校、大学というところまではっきり見えていて、そこまでの線を選択するということになるわけですね。そこは、また別の意味合いがあって、そういう選択肢もあるのかなと思うのですけれども。

やはり公立の中での中高一貫校というのは、あまりしっかりいえないと思っています。

(中條委員長)

それは、学力という意味ではなくて、むしろつながりというか。

(今井委員)

両方です。人間関係の中でも、やはり中高と同じ人の中で、しかも割合小規模、学年 3 クラスの中で、若干のクラス替えがあつての中での人間関係をやっていくのかということもひとつありますし、やはり高校になったときに、高校生の学力とかいうものというのは、ほんとうにピンキリであるわけですから、その中で、ものすごく伸びたいという人もいるでしょうし、自分はやはり地元に残って、地元の中の人間関係を大事にしながら農業をやっていくんだとか、林業をやっていくんだとかいう考えのところもあるのだと思うんですね。

そこというのは、高校のときに、非常に選択肢というものが必要になってくると思うので、中高のところで縛るというのですかね、あまり結び付きを強化するというのはよくないのではないかなという感じがしますね。

(中條委員長)

分かりました。

ほかに、今の中高という観点から、連携校でもいいのですけれども、何かご意見がございましたら。

(藤本委員)

この『最終報告書』やそれ以降の議論を見ていると、県の姿勢として、中高一貫校に対する意欲といいますかその辺のことを、つまり統廃合のほうは非常に議論があるんですが、中高一貫校に対して県教委ではどれくらい考えているのかという姿勢について聞きたい。

(中條委員長)

なるほど。

あくまで、1 推進委員としてのご質問ということで、事務局、お願いします。

(吉江高校教育課長)

中高一貫校の過去の研究といいますが、平成 12 年ぐらいまで研究をしまいいりまして、それから先は通学区検討委員会とか、今回の改革プラン検討委員会の検討の中で、先に送ってきたというようなことにつきましては、過日お伝えしたと思います。

その中で、中高一貫校につきましては、今回『最終報告』のところに出来てまいりまして、実は昨年 8 月 30 日に出了ました『中間まとめ』のところでは中高一貫というのは出来てまいりませんでした。中高一貫校は出来てなくて、いろいろ県民の皆さんやあるいは改革プランの懇話会などで、いろいろな議論をいただく中で、この報告(中高一貫について)が落ちていたのではないかとということで入れさせていただいた次第でございます。

参考までに申し上げますと、都道府県レベルで、これは平成 11 年よりも前に既に出来上がっている私立の学校法人の中高一貫校を除いてということで、平成 11 年度以降ということでお考えいただきたいのですが、全国的には 173 校が平成 17 年度までにできる方向でございます。そのうち、公立が 120 校、それと国立が 3 校で、国公立を合わせますと 123 校ができるということに対して、長野県は現在公立ではありません。

私どもが基本的に、今回中高一貫校ということで位置付けましたのは、まさしく『最終報告』のところに出来てくる意味においては、県立高校と市町村立の中学校との連携というようなことからまず始めたいというようなスタンスになっております。そういう意味では、ある意味で非常に地域に根差した学校のほうがいいのではないかと。それであれば、中高一貫校の中の、例えば 6 年制までの中等教育校などの議論もあろうかと思いますが、それにつきましては、先ほど今井委員さんがおっしゃられたように、果たしてそれがいいのかどうか、例えば、県によりますと 2 クラスで中等教育校をつくるという県もございます。

中学 1 年生から高校 3 年までの、2 クラス 80 人でずっと持ち上げるというような場合に、果たして中学 1 年生の、極論を言いますと中学校から高校に至るまでの間に、ある程度以上、表現は良くないですが序列化ができてしまい、それをそのまま引っ張ってしまうとそれがいいのかというような議論がありますので、それにつきましてはの位置付けは、先ほど申し上げたように、まず連携からスタートしまして、その様子の中で発展させていくというような位置付けが適当なんだろうと。

そういう意味では、中高一貫校の取り扱いについては、ある程度の周りの様子も見ながら、多々議論をいただいた上で展開していくのが良いのではないかと考えております。

(中條委員長)

藤本委員、それでよろしいですか。

( 藤本委員 )

今、「魅力づくり」と、『最終報告』を受けての統廃合というか新しい学校をつくっていくということだと思えるのですけれども、そういった中で、数の問題が入ってくるときに、中高一貫校で、そういったことがクリアできるのかなということが、私が今聴いていて気になったのですが。

( 中條委員長 )

すみません。今の質問は、中高一貫校にすることによって、数の論議がクリアできるというのは。

( 藤本委員 )

クリアできるというのは、例えば、第4通学区の17校という数に、関連するかということなのですが。

( 中條委員長 )

では、お願いします。

( 吉江高校教育課長 )

藤本委員がおっしゃるのは、恐らく、統合という位置付けで中高一貫校が使えるのかなというような感じだと思います。

それで、1つの考えとしまして、例えばA校とB校を一緒にして、中高一貫校という位置づけというものにしてということはある程度得ると思っておりますが、ただ先ほど申し上げましたように、そうしますと、ある程度の規模を、中高一貫校に設けなければいけないという議論になってきますので、これが直ちに統合という位置付けで伝えるかということ、若干疑問があると思います。

むしろ、統合という形ではなくて、今後いろいろな形で展開していく高等学校の中のひとつの大きな「魅力づくり」という設定で議論していただく、そのほうがふさわしいと考える次第であります。

( 中條委員長 )

質問は、中高一貫校をつくれれば数の論議をクリアされるという意味は、しなくていいとか、それが避けて通れるという意味ではないんですね。

( 藤本委員 )

ええ、そうです。

( 中條委員長 )

はい、分かりました。

統合した結果、もしくはするために、中高一貫ということの「魅力づけ」がその対象校に対してできるかどうか、そういうことでよろしいですかね。



ほかに意見がありますか。

個人的に感じるのは、非常に中学数が少なくて、そのエリアから、先ほど今井委員が心配されたような、ほかへの選択肢を奪うような、縛るようなということではなくて、そのエリア内で必然的に10校の中学が、例えば2校、3校の高校に集約されるときに、高校サイドのニーズとして、例えば、中学だけに限りませんけれども、学力低下などがいろいろ言われる中で、生徒の基礎学力うんぬんというお話があったのですが、連携することによって、結果、どの高校に行こうか、何かメリットなり質の効果が高まるなりということがあり得るのかどうか、そういう意味なんです、その辺は特に高校の立場として、連携をしてもその辺の教育の質の効果という言い方は抽象的ですけども、あまり期待できないというか、ある程度期待できるとおっしゃるか、いかがでしょうか。

百瀬委員の立場で、どうですか。あまり期待できないですか。連携といっても都市部は難しいと思うのですが。

(百瀬副委員長)

そうですね、私も分からないというように申し上げたほうがいいと思うのですけれども。

非常に選択肢が少ないといった地区の状況の前には、先ほど今井委員さんが言われたような点は、私も非常に気にかかる場所ですね。

(小林委員)

意見がではないかもしれませんが。

(中條委員長)

はい、ぜひお願いします。小林委員。

(小林委員)

少し意見にならないかもしれないのですがね、この前のときと同じようなことを私は申したいと思います。

今、この中高一貫でいくか中高連携でいくかということで、私も悩んでいるのですが、私はこの前に言ったように、義務で教員をやっていたものですから、中高でなく小中ということで話をしますと、市町村によっては、小中それぞれ1校という場合、こちらの今井さんがおっしゃるように、小学校がそのまま中学に上がっているの、なれ合いでもっていくものですから、すべてのことは分かっているし、学力といっても勉強については、それはやる子はやるけれども、なれ合いがあったりすることと、人間関係が決まってしまうものですから。1村1校の小中といった場合には、そういうことから見ていくと、学力とか人間性などを考えると、よくないのではないかとことを思います。ですから、今は小中で言ったけれども、これを中高で考えても同じことではないかと思うので、やはり人間が一番成長している過程というのは、中学から高校で変わっていくものですから、その時代をととても大事にしてやらないと、将来困るのではないかとことを思います。

ですから、中高一貫よりも、中高連携という形でもって、それぞれ先生たちが、あっちの学校、こっちの学校と見てもらおうと、様子も分かっているのではないかとことを思

うんです。先ほどから話が出ておりますが、そうした場合に、生徒と教師の関係というのはあまりうまくいかないかもしれませんが、その点については、またこれから考えていくとして、中高一貫という考えよりも、中高連携という形で、地域の人たちも含めて、育てていくという形がいいのではないかと思います。

（中條委員長）

小林委員のその経験から、教育の密度という意味での小中での9年間で、密度を上げるよりは、むしろ人間とか、同じ集団ですっとやるよりは、集団を変えたことによるメリットのほうがあるだろうということですね。ただし、先ほど専科の先生うんぬんとおっしゃっていた意味でいうと、連携というところは、中高に関しても、もっと取り入れる可能性があるだろうという理解でよろしいでしょうか。

（小林委員）

はい、そうですね。

（中條委員長）

事務局にお聞きするのですが、例えば、高校は少なくとも県教育委員会が直接見ていらっしゃるって、小中は市町村立という形になりますが、それぞれ百瀬委員も小林委員もそういうお立場ですけど、先生間の連携というのは、何か阻害するルールとか、要因とか、条件などが何かあるのですか。お互いが決めれば、やってもよろしいのでしょうか。

（吉江高校教育課長）

現時点におきましては、高校と小中、いわゆる義務教育との関係で、先生方が相互交流、いわゆる制度として、このあと申し上げますが、制度としてはありますが、今現在、中学の、ある中学にご勤務の方が高校に来られたり、ある高校に来られている方が中学に行かれて、そういう意味での制度的な位置付けでいらっしゃるという方は、現時点ではおりません。

これは、一応まだそういうようなことが満たしていないというような形なのですが、ただそれとは違うような形で申し上げますと、中学の先生が高校に来て、3年なり2年なり研修をしていただいて、また高校の先生が、やはり中学校でも研修をしていただくということで、2、3年こちらのほうで授業に当たっていただくというようなことは毎年実施しております。

そういう意味でいきますと、それを今後広めるというような方向で、可能性がないということとは言えないと思います。

（中條委員長）

冒頭から、連携の事例として、子どもたちは別にして、教員、教師という中で、例えば専科、音楽なら音楽、英語なら英語という先生がいらっしゃるなかったときに、同じ町内に高校と中学があって、1人の先生が、もしかしたらどちらかを教えることによって対応できるということは、今まではないかもしれませんがけれども、ルールとしては、してはい

けないということですか。

（米澤教育次長）

今でも、システムとしてという意味ではなくて、実際に、中学と高校の先生方が、例えば中学の先生が高校で、高校の先生方が中学で教えるというようなことは行われているところもあります。

（中條委員長）

研修ではなくてですか。

（米澤教育次長）

研修という形ではなく、現在はスポット的ではありますが、このことによって、今おっしゃるような、例えば、中・高である専科の数学や英語の先生が、またこれは意味が違いかもしれませんが芸術科の先生により、専門性を中学生にお伝えすることによって、中学生のある層に訴えたりする、次の進路のひとつのきっかけになったりするというような例はあると思っております。

それが今、システムとして取り上げるものがあるかというのは、少し精査しなければ分からないところがあるのですが、今実験的に、草の根興業的に行われているところもあります。

（中條委員長）

仮に、木曾だったら木曾に具体的なニーズがあって、英語なり、音楽なり、芸術なりという具体的な何コマかどうか分かりませんが、そういった要望があれば、個別検討し具体化することは可能だという理解をしてよろしいですか。そういう具体的な連携可能性はある。それ以外の、質を高めるために同じ集団を6年間、9年間持ち上げるということについては、それぞれこれまでのご経験、それからそれを受け入れる立場から見ても、あまりメリットというよりはむしろリスク、弊害のほうが予想、もしくは経験としても挙げられるのではないかというご意見だったと思います。

なかなか個別論議に入れないまま、忸怩（じくじ）たる思いで、いったん休憩します。

あの時計で10分間という意味で、3時5分再開をしたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

【休憩後再開】

（中條委員長）

それでは、時間になっていますので再開をしたいと思います。

やはり抽象的な感じはしますので、過激なご意見でも結構ですので、個別かどうかは別にして、具体的な論議を深めるという前提で、何か進め方でこうすべしというご意見があれば、ぜひ賜りたいのですが。

はい、お願いします。

(百瀬副委員長)

私は、最初からちょっと感じていたのですけれども、私どもがいただいた宿題といいますか、諮問事項というのが2、3点か4点ぐらいになっているわけですね。これがどういう形で答申といいですか、どういう形で答申書というものができるのかなと。そういうことが少し頭にありまして、こういう形のものになるのかなということが想定できればいいのですけれども、今は想定ができないものですから、実は何をしゃべっていいのか、なかなかとまどいがありましてね。

(中條委員長)

ぜひ、過激なこともおっしゃって。

(百瀬副委員長)

過激じゃないと思いますけれど。

というのも、この検討委員会の『報告書』も、検討委員会への諮問事項が大きく2つあったんですけれども、それに真っすぐ答える形のスタイルになっていないんですよ。ですから、我々の推進委員会の答申書も、どういう形になるんだろうというような、その辺を確認しておいたほうが、話がしやすいのかなと、そんなことを感じているんですがね。

ぜひ、その辺の皆さんのご意見を聞かせていただきたいと思います。

(中條委員長)

皆さんの意見を聞く前に、百瀬委員としての百瀬案としては何か。イメージで結構ですけど。

(百瀬副委員長)

イメージといいですか、結局この委員会というのは、高校改革を推進するための審議機関ということになっているわけでありまして。そしていわゆる審議事項として、4つですよ。1つが「魅力づくり」になる。2つ目がその再編整備と。3つ目が、総合学科と多部制・単位制となっていますよね。

その魅力ある高校づくりと、それから再編整備、ないしは総合学科、多部制・単位制との絡みといいですか、当然これはあるわけですよ。ですから、それぞれの事項について、この事項についてはこういう答申書になります、この事項についてはこうなりますと、どうもこういうことにならないのではないかという感じがしているんですよ。

ですから、何か再編整備なり、総合学科、それから多部制・単位制との、そういった具体的な事項との絡みの中で、「魅力づくり」の話を、今しているはずなのですけれども、なかなかその辺が、今やっている議論が、どういう形の答申書というような形になってくるのかということが、私自身見えないものですから。

(中條委員長)

ブレイクスルー(事務局注：行き詰まりが打破されること・前進)するためには、例えば。

( 百瀬副委員長 )

難しいですね。

( 中條委員長 )

一応、第 1 回は別にして、第 2 回の中で、今百瀬委員がおっしゃられたように、個人的感覚もそうなんですけれど、検討委員会の最終報告書そのものが、「魅力づけ」とその再編とがまったく分けて書かれているので、その辺の関連性をどう理解するかということを確認する。

従って、「魅力づけ」と再編では、まったく独立、別個のものではなくて、両方を踏まえてやるべきだと思います。ただし、再編の前に「魅力づけ」という議論をきちんとすべき。それが抽象論で、なかなか進まないというジレンマは、今皆さんが感じていらっしゃると思うのですが、少なくとも再編を踏まえながら、再編という意味でいけば、案どおりでいくのか、違うのか、数の問題はとするんだ、3 校減なのか、2 校減なのか、5 校減なのかということも含めて、それぞれの魅力を踏まえて、ではどうするかということを最終にまとめる。

多部制と総合学科については、いったんほかの通学区に比べると、すでに設置されている部分、それからそれに先行するというか、それイコールではないにしても、ややそれに近い形で先行している学校が、たまたま我々の通学区にある。それをベースにして、足りないなら増やす、違うところのほうがよければ、それは変えるというものが出来なければ、最終納期どおりという意味でいけば、そこまで行き着かなければいけないという意味で、具体的にどうするかなんですけれど。

( 鈴木委員 )

若干技術論的なことになってくる部分もあると思うのですが、進め方と本委員会としての最終報告をどういうふうにかくのかということなどもにらみながらいかないと、なかなか前へ進まないということだと思うのですよね。

私が思うには、4 つの諮問事項があって、その第 3 番目の総合学科高校と多部制・単位制については、この第 4 通学区については、ある意味では設置済みというように考えたとすれば、( 4 ) のその他、各号に関する事項ということに関連させて、今の志学館と筑摩高校を、どのように充実していけばいいのかという。今、どういう問題点があって、では、それをどのようにしてクリアしていく課題があるのかというあたりを、書いていけばいいのかなと思うんですね。

筑摩については、例の県教委の候補案の中で、全日制をなくして多部制・単位制の独立校にするというような案が出ているのですが、それは「魅力」という部分で話し合いをしていって、多部制・単位制のところ、すなわち定時制のところ、全日制があるということがいいのか悪いのかというようなことを、どういう形が多部制・単位制の魅力になるのかということを議論していくと、そこで数の問題にも入って行けるのかなというように思うんです。

だから、書くこととして、まず、設置要綱第 2 条の第 3 番目にある総合学科と多部制・単位制については、まず我々は 2 校の現状を知りながら、課題等があれば書いていく。

それから魅力に入るんですけども、この『最終報告』の中で、新しいタイプの学校だとか新しいシステムだとか、あるいは単位制の問題だとか、プラットフォームの問題だとか、あるいは公設民営化等のいろんな提案があって、その中の1つに中高一貫教育校というものもあったりして、今その議論が始まっていると思うので、この『最終報告』に書かれてある新しいタイプやシステムのうち、第4通学区としては、これは採用できないけれども、これについては、こういう場面で、こういう地域でできるのではないかということが、一定の議論ができて固まっていけば、それを書けるのではないかと思うんですね。

その結果として、では数の問題で、どういう決断になっていくのかという形の議論になるのかなと思うんです。

進め方に関する、私もイメージなんですけれども、今日の前段の議論のことについて若干発言させていただくと、この『最終報告』には、中高一貫教育校については、6年間継続することによって、「計画的・継続的な教育指導をして生徒の個性の伸長や優れた才能の発見がより期待できる」、このように書かれているのですが、私が想定しているのはそうではなくて、中で足りない部分、高で足りない部分を、連携によってお互いが補完する形の連携校をイメージしているのです。

今井委員の意見で、都市部の一貫校はいわゆる進学向けの高、大までつながるという、確かにそうだと思うのです。それを長野県でやるというのは、これは無理だと思うんです。例えば木曽地域で、木曽高と木曽福島中学校が中高一貫になったとすると、場合によっては、木曽福島中学校に木曽郡の中学生が一気に殺到すると。その結果、中学校の統廃合につながってしまうようなことにもなりかねないと思うんですよね。

だから、やはり一貫校というイメージというのは無理で、お互いの足りない部分を補完し合う連携というのは、例えば木曽だけではなくても、例えば南安曇、北安曇というようなそういった地域で、可能なところはやっていくということは書いていけるのかなというように思います。

(中條委員長)

今のご発言のあとですみません、ちょっと確認をしたいのですが、総合学科、多部制の現状の課題を整理、検討する中で、数の議論に入っていけるのではないかというご発言だったと思いましたけれども、その意味は。

(鈴木委員)

それは、県のほうの案では、この第4通学区は3つ減らすということですよ。大北地域で2つを1つにし、木曽で2つを1つにし、もう1つは、筑摩高校の全日制を1つなくすことによって、3つという案がクリアできるというのが候補案だと思うのですけれども。その北と南の問題はまた別の問題にしたとしても、多部制・単位制についての魅力を検討する中で、松本筑摩高校の全日制があるということが魅力につながるのか、あるいはないということが魅力につながるとかという議論ができれば、数の問題に入っていけるかなと思います。設置要綱の中にある2条(1)の問題のことです。

(中條委員長)

(1)についてですね。

場合によって、多部制・単位制高校を増やせば、さらに1減ということもあり得るということ。

(鈴木委員)

そう多部制を先にこれに入れる形になれば、それはあると思います。

(中條委員長)

そういう意味では数ということになると。

ほかの委員のみなさん、進め方についていかがでしょうか。

(下川委員)

ご検討いただきたいと思うのですが、「魅力」ということについては、本来この推進委員会の中で、第4通学区の全高校がそれぞれの立場で、学校の方向性などを発表できる場があれば一番いいと思うのですが、時間的に無理があると思いますので、今回アンケート調査で学校からいろいろな資料が出ていますが、やはり実名の出た学校については、のどから手が出るほど生の声というものを、この推進委員会に伝えていきたいのではないかなというように思います。モデル校である塩尻志学館、それから松本筑摩等も含めて、現状を踏まえてこの推進委員会の中で、その生の声を伝える場がないのかどうかということも検討していただければありがたいかなというふうに思うんですが。

(中條委員長)

はい、分かりました。

(下川委員)

先ほどジョイント高校のことで触れましたけれども、これも1高校でどうのこうのではなくて、やはりそれぞれ地域を絡めた中で検討していることもあると思うので、そういう生の声を届けられる場があれば、より踏み込んだということでもないでしょうけれども、それを聞き入れた中で議論もできると思うので、検討いただければなというように思います。

(中條委員長)

では、いったん先に、今日以降も含めてになりますけれども、進め方についてのご意見を先にいただきたいと思います。ほかの委員のみなさん、いかがでしょうか。

できれば、一言でも構いませんので、全員の方にお聞きした上で、今いただいた検討してほしいうんぬんはちょっとあとに回しますが、一応全員の方のご意見をいただきたいと思います。

どういう順番でも構いませんが、いかがでしょうか。

(今井委員)

今回、高校をいかに改革していくかというところが一番のテーマですが、今日いただいた資料を見ていて、こういうところもきちんと検討しないと、この前県のほうから発表された学校を少なくするだけというような論議に終わってしまうと思うんですね。

今日渡していただいた資料2のところの「平成16年度の募集定員との比較」、中学2年生のときにどういうところへ行きたいか、普通科なのか英語科なのかということと、現実の募集定員を比較した表があります。これを見ますと、やはりかなり普通科以外のところを見ますとギャップがあるんですね。アンケートでは2.7%の生徒さんが行きたいと言っているけど、実際の募集定員は0.9%しかないとかいうような、いわゆるミスマッチのところですね。こういったところも、きちんと論議して、全体の、いわゆる普通科以外の専門学科のところの配置や、定員の見直しというものも、きちんとここの委員会の場として審議していく必要がある。

それと、一方で、その専門科自体が、この資料5にあるのを見て私はびっくりしてしまったのですが、これをよく見ていくと、農業科の高校生というのは将来に何の希望も持っていない人が8割もいるんですよ。何のために学校に行っているのかなと、このデータを見たら、もう考えちゃいますよね。本当に、こういう学校を存続しておいていいのですか、これ。この表というのは、我々はこういう高校の教育自体を改革しようということを進めるという立場で見たときに、こういうことは、大いに見逃してはならないデータだなと思っています。

ですから、そういうところもきちんと踏まえていったときに、最後に、どうしてもそこをつめてくると、やはり数の論議に、最後は入っていくということになると思うのです。

やはり、「魅力ある」というところのテーマを、徹底的に論議して、それなりの答え、その「魅力ある」という論議も当初もありましたけれども、クラスの編成人員とか、そういうところもやはり含まれてくるのかなと。その辺のところは、ある程度、回答書の中にも盛り込まなければいけないテーマかなというように思いますので、そんなところをぜひ進めていっていただきたい。

(中條委員長)

はい、ありがとうございます。

それでは、ほかの委員のみなさん、いかがでしょうか。

(野口委員)

今の今井委員さんと同じようなことなのですが、地域の中で、生徒が希望する学科があるかとか、学校があるかというようなことも、検討していかなければいけないことだと思います。

統合することによって、それが減ったりというようなことになるのはいけないと思います。生徒の希望と、それから実情がどんなかといったことも検討していただきたいと思いますし。



(中條委員長)

嫌みな言い方をするわけではありませんが、足りなければ増やさなければいけないし、多ければ減らさなければいけないしという。

(野口委員)

そうですね、当然のことだと思います。

(中條委員長)

はい。

ほかの方、いかがでしょう。

(長谷川委員)

私も、このようになってきたときに、非常に話がなかなか難しいなと思うのですが、先日たまたま存続を求める総会に行かせていただいて、豊科で行われたものなんですけれども、その時に、やはり分からないことに対しては非常に恐怖感がありますね。例えば、今総合学科というのがこの地区だとはっきりあって、あれだけうまくいっている例があると、非常に安心して、「じゃ、総合学科はどんどんやりましょう」とか、あるいは「行かせましょう」という話になってくるのですけれども、例えば筑摩が全日制廃止案が出たときに、これに不満を感じている意見があると思いますが、多部制・単位制というのはそれに変わる、あるいはもっといいもののはずではないのかというところが、いま一つしっかり来ない感じのところもあり、親御さんもその辺がまだはっきり掴めていないのではないかと思います。

私は10何年前に新潟のほうの大学に行ったのですが、その時に、そこで校長先生がおっしゃっていたのは、とりあえず大変閉塞(へいそく)感が高校の中にあるときに、単位制を導入することをやってみなければ分からないので、ぜひこれを実験的にやってみたいということを、すごく前向きに話していた校長先生がいらっちゃって、きっとそういうところだったら、また魅力ある学校になっていくのかなということを、若いころだったのですが感じたのですけれども。

やはり、具体的にこのように名前が出てきたところもあるのですが、筑摩高校さんでこのようになったときに、やはりぜひ現場の声というのは聞いてみたいなど。高校のほうでこういうものを導入して、このようにやってみたい、こういうことは危険性を感じているのかな、あるいは逆に言うと、もし他県のところで具体的にこういうことをやってみたのだけれども、こういうメリット、デメリットがあったとかいうところが、またもう少しはっきりしてくるといいなということを、ちょっと感じました。

(中條委員長)

今の長谷川委員のご意見は、さっきの下川委員のご意見とは別で、総合学科および多部制、総合学科はある程度分かっている、特に多部制について、対象と今名前が挙がっている筑摩高校の現状を理解し、実際の声を聞きたいが、それ以外もすべてということではなくて、多部制に関してという。

(長谷川委員)

そのほかでも、きっとあると思うのですが。

(中條委員長)

そのほかというのは、例えば、実際に名前の挙がっている学校と、さっきのご意見と同じという理解でいいですか。

(長谷川委員)

そうです。

(中條委員長)

はい、分かりました。

ほかにご意見ありますか。

(小山委員)

今、高校改革について検討している中で、地域の比重というのが大きいと思われるので、旧通学区の第10、第11、第12通学区ごとに具体的に地域の中の課題や「魅力づくり」について検討していったらどうでしょうか。より一層具体的な話をできると思うのです。

(中條委員長)

地域の声を具体的に検討してという。

(小山委員)

そういうこともありますし、全体の「魅力づくり」の話をしてもなかなか具体的な話にならず、抽象的にこういうのがいいのではないかという話だけなので、木曾ならこういう「魅力づくり」を推進したほうがいいのか、大北地区ならこういう「魅力づくり」があるとか、課題等を皆さんで検討して話をしていたほうが、より意見が出やすいのではないかと思います。

(中條委員長)

例えば、今日は大北地区だけに限って「魅力づけ」なりも含めて議論しましょうと、そういう理解でいいですか。

(小山委員)

まあ、例えばそうですね。

(中條委員長)

例えばでないとすれば、どんなふうに。

いや、方法論を知りたいのですけれども。

( 小山委員 )

第 4 通学区全体ではなくて、地域ごとに大きく分ければ、第 10、第 11、第 12 という通学区に分かれているので、その中で話をしたいらどうかと思いますが。

( 中條委員長 )

それをするために、具体的にどういう方法、やり方であればそれが実現できるかという意味で、例えば、我々のところも、前々回ぐらいに意見としてはいただいているのですが、この推進委員会の下に部会を設置してほしいという意見も一部出ています。ほかの推進委員会でもそういう声が上がっています。

そういうやり方があるでしょうし、それから、先ほどベースとして申し上げたのですが、例えば、今日は大北地区だけのことをやりましょう、次回は木曽地域だけのことをやりましょうと。その次は、例えば南安のことだけのことをやりましょうとか、都市部高校だけのことをやりましょうということで、小山委員のおっしゃっているイメージに合うのか、前者のようなやり方のほうがよろしいのか、もしくは公聴会的に全エリアを回って生の声を聞けということをおっしゃっているのか、言っていらっしゃることは分かるのですが、具体的な方法論として。

( 小山委員 )

全地域を回ってということまではいきませんが、ただ実際に、私は中学校の保護者なのですが、この推進委員会に来て、県の資料と、新聞等でしか情報が入って来ないので、やはり生の声も聞きたいなとは思ってはいます。

検討するに当たってもらった資料ぐらいしか検討材料がないので、実際に私にとっては、その辺もちょっと問題かなという気がしますが。

( 中條委員長 )

では、方法論ということではなくて、我々が検討するに当たって、生の声を聞きたいという理解でよろしいですか。

( 小山委員 )

そうですね。

( 中條委員長 )

はい、分かりました。

ほかの方、どうでしょうか。

( 今井委員 )

小山委員さんのお話の中で、よくこういう話をするときに、「生の声を聞く」という話が、ここでも何回か出ているのですが、その「生の声」というのはものすごく難しいことだと思っているのです。具体的に、その「生の声」というのは何を求めて「生の声」というのかというのがよく分からないのですが。

(小山委員)

現場の声ということですね。実際、名前の挙がった高校がありますよね。その高校ではどのように考えているか、だいたい新聞等の報道で分かりますが、実際に高校生の人たちの声を参考に聞いたらどうかということです。

(中條委員長)

では、進め方の意見だけは全員の方に聞いた上で、ちょっと焦点を絞りたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

まだご発言いただいてない方、どうでしょうか。よろしいですか。

(藤本委員)

私も、委員長がほんとうにご苦労されてやっているのは伝わってくるのですが、どのようにしていったらいいかなと考えているんですけども、今さっき地区に限って、例えば今日は大北のことを考えましょうとか今日は木曽郡のことについて考えましょうとか、今日はじゃあ第11区、松本、松塩筑のことについて考えましょうということはあるかもしれないと、今聴きながら思ったのですけれど。

そういった中で、県から出ているたたき台がひとつの考えの基礎になると思うんですね。それをどのようにするかということが、我々に課せられているという気がするのですけれど、そういうものを具体的に考えていかないと、議論は深まらないというような気がします。

やはり、全体で考えていくと、どうしても個別の議論にはなれないものですから、しかも、さっきちょっと委員長さんが言われましたように、木曽と南方の蘇南とは生徒の動きが少し違うんですね。ちょっと似ているのは白馬だと思うのです。生徒のパーセンテージを見たときに、ちょっと違うなあというように思うところもあるものですから、そんなことも今感じましたね。

(中條委員長)

ありがとうございました。

ほかの方、どうですか。小口委員、何かございませんか。

(小口委員)

難しすぎて、分かりません。

もしやるなら、具体的に名前が出ているので、ではここをマイナス思考で、「おらたちの高校がなくなっちゃうで、やだ」というのは当たり前であって、これをいいと言う人はまず1人もいないでしょう。そこをブレークスルーしないと、はっきり言って一向に進まないですね。もしこれを、プラス思考でとらえて、2つの高校を一緒にしていい高校にするんだと。そのときに、その高校はどんな魅力を持っていくかという表現でやれば、具体論に入れると思うんですね。今日までを考えてみますと、ある時期には、そういう方向に行かないと。だから今ある高校の名前を是認してしまうのではなくて、そういうシミュレーションをしていけないなという気がしましたですね。

そして、かつ「魅力」という点ですけれども、何が魅力かという点ですね。私の立場で考えると、頭のいい子で理科系へ進む子を、高校でたくさんつくってもらうことが魅力でありまして、多くの親なり、もしかしたら今井さんも企業人としたら、それが多くの希望であるわけです。

また、高校生の魅力という点でとらえると、自分の人生の中で極めて多感な3年間を、どのように有意義に過ごすかということが魅力であって、それはその高校に魅力がなくても、よその高校に行けるような選択肢があれば、その子にとっては魅力ですから、ちょっと進め方という点からははずれてしまうのですけれども、そんな議論にしていく時期があるときに来ないと、なかなか、みんながそれぞれフラストレーションを持ちながら帰路に就くような、会議になってしまうような気がいたしますので、ちょっと中條委員長の過激な発言も踏まえまして、このようなことを考える次第でございます。

（中條委員長）

やはり、個別論議をせざるを得ないだろうと、プラス思考で。

（小口委員）

そうですね、と思いますね。ある時期には。最終が決まっているんでね、取りあえず。

（中條委員長）

ほか、よろしいですか。

今出た意見をまとめるのではなくて、繰り返します。

1 つは、総合学科、多部制の現状の課題。ちょっと我々の通学区はほかと違いますけれども、それを踏まえて課題を整理することで、一応案で言えばマイナス3なんですが、マイナス1かどうかは別にして、数の論理も当然多部制への転換の前提になるとすると、全日制廃止ということもいったん出てくるだろうというのが1点。

それから、新しい形態の高校を、具体的にどの地域で、どういう形でというのを提案していくべきだ。

もう1つは、実はこれは前回も同じ意見があったんですが、子どもたちの進学の学科希望を踏まえて、今の学科編成なり、もしくは平成31年は今生まれた子が高校に入るところがターゲットになっていますけれども、その段階での減少を踏まえての、今言ったことが、実態に合っているのかどうか検証すべきではないか。それが、当然「魅力」の議論につながり、かつ数の議論にもつながるというご意見。

それから、あとは、それぞれの案ということで、「たたき台だ」、「白紙撤回だ」うんぬんという議論が外ではされているのですけれども、やはり名前が出たことによる不安という意味では、それが見えないということも踏まえて、生の声をというご意見ですね。もしくは、その地域の声を聞きたい。ただし、その生の声というのは、何ををもってという意味では非常に難しいというご意見もいただいています。

あとは、全体で議論するよりは、特に我々の地区の場合、南北に非常に長いということと、地域の差というのが当然ありますので、一律的な議論ではなくて、絞っての議論が必要ではないか。そのためには、場合によったら、回ごとにエリアに絞ってのテーマだとか

議論があってもいいのではないか。

最後に、マイナス思考ではなくて、プラス思考ということで、案を是認するという意味ではなくて、それをたたき台にして個別の議論に入っていけないと、冒頭にご発言いただいた、何月かは別にして、最後に我々の責任として、どういう形で求められている多部制、総合学科を含めて4つの答申といいますか課題に対して、具体的にどういうイメージかがよく分からないというお話もいただきました。

最初に、皆様のご意見を聞いて、我々としての考え方をまとめておきたいのは、12月を前提とすればあとまだ5カ月ありますから、そういう意味では、月2回ペースで10回ということになるんですけれども、一応そうは言っても限られた回数の中で、何をもってというところは少し置いておいて、いったん再編案であることでたたき台であるということの位置付けですけれども、対象となった実際の個別高校の関係者の方々の生の声を聞いたほうがいいのではないかというご意見。

それから、多部制、総合学科の実態ということも含めて、今あるからそれはそのままいいのだということではなくて、何かしらの課題があって、場合によったら、増やすんだ、不要だということも含めて聞いたほうがいいのではないかということも、同じような意見なのですが。

そのご意見について、我々としてどうするかをいったん決めて、次回ということではなくて、どこかのタイミングで必要があればそれはするとしても、ある程度の方針としての方向付けを出しておきたいと思いますが。

最初お2人から、もしくは3方からいただいたんですが、生の声というのは何をもって言うのか非常に難しいというご発言、ご意見もいただきましたし、それから、個人的に言えばですけれども、ややもすると、先ほどご発言もあったんですが、それを是認するような形にとらえかねない、我々自身が、それはどういう報道をされても一向に気にしませんけれども、されかねないということも危惧しますし、仮に違う案になれば、ある意味では20校全部を聞かなければ、公平な議論なり検討ができるのかということと、今井委員も人事関係をやられていますのでわかりですけれども、10分あれば分かることもあるのですが、1年間一緒に過ごしても分からないことも採用上はあるので、そういう意味で、たかだか1時間、2時間、3時間で20校にどう割り振るかということで、どこまで分かるのかということの不安も、個人的には感じます。

そういったデメリットばかり言っていてもしようがないので、当然生の声を聞く、何ををもっては別にして、実際の関係者の声をどう聞くかと言うことの方向論なり、聞くことのメリットも否定はしませんが、さっき言ったような逆も含めて、どうすべきかの方向付けをしたいと思いますので、ご発言をお願いします。

いかがでしょうか。

参考までにですが、第3通学区で、飯田それから松川、飯田工業の3校だけを視察されたというように聞いていますけれど、3校で終わり、もしくは何かしらの代表校という意味での3校という理解でよろしいでしょうか。

(吉江高校教育課長)

第三推進委員会におきましては、学校の現状を見たいというようなご要望を第3回目の委員会でいただきまして、たまたまその第4回目を開くときに飯田地区ということもございまして、飯田地区でいろいろな特色といういろんな意味で、またある程度の規模があり、また市内校であるというところでの飯田高校。それから、松川高校というところは、いわゆる地域高校ではないのですが、ある意味で地域に根差した普通科の小規模高校、さらには、専門高校という位置付けの飯田工業高校をご覧ください。

このような学校以外に、ではさらに見たいというなお話には、現在は至っておりません。

なお、第一推進委員会、北信のほうの委員会でも、学校を見たいなあというなお話は若干出てはありましたが、これも具体的に、ではいつにどんなところを見るというなお話にまではまだ至っていないという状況でございます。

(中條委員長)

はい、ありがとうございました。

第2回にも同じような議論はあって、実際いったんその段階では、県教委のほうからリストは頂かなかったですかね。各学校のホームページで、基本的にはすべてオープンで学校訪問は可能ということで、ほんとうは全員が行って同じ場面を見たほうがいいのかもしれませんけれども、時間的な制約の中で、ぜひ希望があれば、そういったことを活用して、実際の、対象校だけということではないのですけれども、第10、第11、第12、第4通学区というと20校を、ぜひ訪問してほしいというか、希望があればぜひお願いしますというご意見をいただいていますので、その辺も踏まえて、具体的にではどうするのかというところで、ご意見をいただきたいと思います。

どのタイミングかは別として、仮に今でいえば、総合学科、多部制を入れると、対象校は6校ということになりますけれども、それ以外の、仮に我々が案を含めて校名を出すのであれば、当然その学校も含めて、何かしらの、我々が行ってなのか、来ていただいてなのか、それはその場でまた確認するとしても、何かしらのヒアリングが必要だというご意見がございますか。

むしろ、客観的に必要なものは、声というかデータになるのかもしれませんが、県教委に求めて出してもらって、それをたたき台・ベースとして検討すべきという意見があれば、そういうご意見。

いかがでしょうか。

(小口委員)

私は、この県教委の候補案が何の論拠もなく出されるわけがないので、これはもうちょっと詳しくご説明いただいたあと、その論議に矛盾があるのであれば、私たちも違う校名提示、そこまでの勇気は正直言って私はないですけれどもね、名前を出せる方がおられれば、そういう案をつくっていかねばいけないので、その際には当然のことながら、その高校も視察しなければいけないところですね。例えば、松本地域にたくさんありますので、これとこれを統合しちゃえということも、まるっきり無理ではないと思いますね。

そうであるならば、それは今ある校名をリセットするわけですから、現実的にはものすごいエネルギーと勇気と度胸がなければできない話です。

ですから、今挙がっている内容を、明確に、背景も踏まえて、深く研究する必要があると思いますね。

（中條委員長）

ほかにご意見がございますか。

いったん、今お話のあった背景説明については、確か第2回にご意見があって、あのときは大北地区という指定であったのですが、なぜそうなったかきちんと説明すべきだというご意見はいただきましたが、いったんその場で、いい悪い、なぜだということの個別論議に入らずに、まずは、再編は棚上げしてということではなくて、再編と連動させながらの「魅力づけ」をする中で、必要な時期に、それはきちんと説明責任、納得性、説得性を含めて出していただいた上で、今小口委員からありましたが、違うものを求めるのであれば、そういった資料要求やデータ提示もお願いをした上で、我々としても、別の案なら別の案を踏まえて議論をするということで、いったんそういう希望が挙げられたことは、その2校に限らずほかも含めての理解は皆さんにいただいていると思いますし、ただ、あの段階でのタイミングではないということで、棚上げはさせていただいたという経緯はあります。

（小口委員）

私ばかりいろいろ言ってますみませんが、もう1回白紙に戻すという言い方はおかしいですけれども、さっき言いました高校の持つ使命というものを論じないといけないかなという気がしております。

高校生はやはり、今97%が進学をする現況にありながら、現実には義務教育ではないわけですから行く義務はないと。何らかの形で求めて高校生活を送ってもらわなかったら、本人にとっても人生の中の3年が無駄になりますし、また、社会にとってもそれは損益がありますから、どんな高校生を輩出していただくのが長野県の高校教育としていいのかをつめていくと、そこにはどんなステージがなければいけないのかというのが、おぼろげながら見えてくるのではないかと思います。

高校の魅力というのは、個々の高校が持つ魅力を、それぞれが起用させて人の高校の粹を取っても、マスが下がっていることは先に見えているので、これは無益な競争であると思いますから。

1例を申し上げますと、アメリカのある州では、7時半から12時までは、ほとんどの高校生が同じ学力をボトムアップするために勉強すると。そのあとは、遊びたい者は遊んでいればいいと、サッカーする人はサッカーをしていればいいと。自分が大学に行って、例えばITのエンジニアになりたい人は、自分で選択をしてその高校に1時間が1時間半かかっても通うというようなことをやっている州なのか、国全体なのか、これは聞いた話でありますから、どなたか分かったらお知らせしていただければありがたいと思うのですけれど。

そのようにしていかないと、なかなか魅力もあり、学力も高めてもらわなければ困るし、



社会人として通用してもらわなければ困るということは、現実性がないような気がいたしますので、今日は参考意見として。

（中條委員長）

高校の使命というのは、先ほどのご発言にもあったのですが、それは高校生にとって、それから…。

（小口委員）

高校生と、社会と両方ですね。

（中條委員長）

両方ですか。

（小口委員）

私の持論としたら、通学できる範疇（はんちゅう）で選択制を、広い選択ができるようにステージを用意してやることだと思うんですね。

私も今、高1と高3の2人男の子がいますけれど、その時点では、自分自身が何になりたいかという明確な意志は持てない。だから、ここにも書いてあるように、普通科を選んで、成長の過程に伴って、だんだんに自我が出てくるのかなという時期だと思っているので、その自我が多少芽生えたときに、それを、受け皿たる地域プラットフォームがあれば、その中で自分が入って伸びていけるのかなあという気がしているところです。

（中條委員長）

ということですか。あくまで、イグザンプルですか。

そういう高校を塩尻市立でつくろうなんていう気は無理ですかね。

（小口委員）

あの、理想論で言えば…。

（中條委員長）

では、某市立でつくるというのは無理ですかね。どこの市でもいいのですけれども。

（小口委員）

特区でなければ、無理ではないですかね。

（吉江高校教育課長）

特区でなくとも市立で可能です。

(小口委員)

正直に言いますと、松本歯科大学というのが塩尻にありまして、その学長とは、再三お願いしているんです。私たちでは全部みれないから、半分くらい出すのでということで、まだなかなかそこまでの関係は整っていない状況ですが。内輪話をしてすみません。

(中條委員長)

市立ではなくて、私立ですか。

(小口委員)

そうです。

(中條委員長)

そういうモデル校があったらいいなという意味ですね。

(小口委員)

そうです。やはり夢に近いといえますか。

(鈴木委員)

小口委員が言われるような高校について言えば、『最終報告』では、進学対応型の単位制高校であるとか、多部制・単位制高校とかという提案はあるわけですよ。それでいいのかどうかという問題が、具体的な話になってくると思うのですけれどね。イメージだけで話すのではなくて、この『最終報告』に何が書かれていて、これはどうなのかという具体例で言えば、今の話は、進学対応型の単位制高校に該当すると思います。

74単位は、絶対に今の指導要領の中では必要なわけですから、それがアメリカでいう何時までの授業で、あとは残っている10数単位は、どうするのかということを、そういう学校がよければ、単位制高校なんですよ。

そういう議論をしていかないといけないと思います。

(中條委員長)

では、ちょっとその議論は置いておいて、具体的な「魅力づけ」の中で、多部制・単位制になるのですかね。では、議論するとしても、どのタイミングでというのは別にして、いったん話を戻しますが、ヒアリングについてのご意見がもしあれば、先ほど言いましたように、我々として、今日は無理なら次回でも構わないと思いますけれども、方針といいますか考え方合わせをさせていただきたいのですが。

もし意見が出ないようであれば、次回の課題として先送りにします。

(藤本委員)

ヒアリングといいますか、そういうものがどうかというのは、今のところ私も判断ができないのですが、市長さんが言われたように、再編整備候補案とは違うほかの高校が、この委員会の中で名前として挙がってきたときに、例えば、それは直接聞くというこ

とが必要になるかもしれないし、今のところそういう緊急性というかそういったものがあるのかどうか判断できかねます。

仮にヒアリングを実施した場合、すべてはとにかく残せになってしまうのではと思いますがそれで、我々の使命が務まるのかということがあると思うんです。そういうことで、もう少しほかの方法を進めてからそういういったものが必要であればやっていくというように形にさせていただいたほうがいいのではないかなというように思います。

少子化の中で、皆さんが少ない中で何とかやっていかななくてはならず、こういった時期に高校のありよう等を考えなければいけないのはひとつの危機の中にあると思うのです。そうすると、例えば会社が危機になったときに、これは会社を絶対何とかしなければいけないということで、より努力しなければいけないということで、みんな必死になると思うのです。同じように第4通学区が、この第四推進委員会が必死になって、みんなでいい方向になればいいと思うのですが、この危機的な状況というのは、ただ人数だけの問題だけではないと思うのです。例えば、前に言われている大糸線問題というのがあった。例えば、今で言えば、黒ギャングの問題がここでは出てきませんが、例えば中学のガラスが割られたり、そういったいろんな暴力事件が起きたりという問題だってあると思うんですね。そういったものを、どうしてそういったことが起きるのか考えると、先ほど言われましたようにもしかしたら、高校が生徒の希望に応えていないかもしれないと。例えば、6時間もやりたくもない授業で机にずっと縛り付けられて、それでほんとうにいやになってしまうという部分があるかもしれないんですねそういった現実を、やはり何とかする。何とかしてくれではなくて、この現実困っている部分を踏まえながら、じゃあ、どうしたらいいかというふうにしていってほしいなというように思います。そうするには、先ほど委員長さんが言われた中で、地区によっていろいろ事情が違うものですから、我々が全体的に考えていても仕方がないので、それぞれの地区でどうするかというようにやっていく方が1つの方法かなという気が私はしています。

以上です。

(中條委員長)

今のご意見は、地区ごとにある程度焦点を絞ってその高校をどうすべきか「魅力づけ」という前提で議論をするということで、そこへ出かけて行ってとか部会をつくってとかいうことではないですね。はい、分かりました。

一般論だけで全体でやっていても、具体的な論議なり個別になかなか行き着けないという前提でよろしいですか。はい、分かりました。

もう少しお聞きしたほうがいいのかもかもしれませんが、一応個人的なものも含めて、今の藤本委員のご発言で代表しているのかなと思いますが否定するわけではなく、まず声というかデータというか、我々が欲しいものはきちんと要求するとして、できるだけ客観的なものをベースにどうすべきかを議論し、必要な段階で、ヒアリングが必要であるという判断をすれば、来ていただくなりして実態を確認していくと。

ただ、個人的にと思いますが、「生」ということ、それから「何を」というのが、その段階になったときに、たぶん非常に難しいだろうなという気はしますが。

一応そんなことで、もし反対があれば、また議論は進めますが、今日の場はそれでよろ

しいですか。

先ほどのご発言では、小山委員、下川委員、それから長谷川委員、委員3方から、一応そういうご意見をいただいていますけれども、そんな進め方でよろしいでしょうか。

はい、3方はよろしいという前提でいいですか。

（百瀬副委員長）

だんだん自分の頭の中も整理されてきたかなというような気はしているのですが。

その際、素材ということでたたき台が出されているわけですので、その県教委のほうから出されているものを検討していくと、その中で、ということがやはりいいかなということを感じているのですが。その中で、「魅力ある学校」をどのようにつくっていくかと、こういう議論がなされていくと。どうもそういうことでないと、なかなか先に進んで行かないかなと、そのように思います。

（中條委員長）

たたき台という意味は、要は再編案という意味ですね、それも幾つかご意見があったのですが、それをベースに議論をしていったほうがいいのではないかとということですね。

ほかに、ご意見どうでしょうか。

（鈴木委員）

私も大筋でそれでいいかなと思うのですが、やはり魅力ということをまず議論しよう、第4通学区の「魅力づけ」ということから議論が始まっているので、そこで変わったりしたくないなと思います。

もう1つは、この『報告書』には、各通学区にそれぞれ1校以上配置するとしている総合学科と多部制・単位制については、その地区での話し合いの中で議論をしても、やはり難しい面があるのではないかなと思うんですね。この部分については、第4通学区に1つ以上ということで、1つになるのか、あるいは2つになるのか分かりませんが、この総合学科と多部制・単位制については別個で議論して考えていかなければならないと思っています。

もちろん、今この旧通学区にそれぞれ1つずつ置くというような案も出るのかどうなのか、でもそれはちょっと無理があるかなと。

（中條委員長）

別個という意味は、案を別にではなくて。

（鈴木委員）

今は、3地区単位で話をしましょうですね。その枠とは別に、この総合学科と多部制・単位制の学校については、議論したほうがいいという案です。

(中條委員長)

はい、分かりました。

そっちのほうからやったほうが、やりやすいですか。

(鈴木委員)

と思います。

(中條委員長)

では、そういうご意見もあります。

ほかにいかがでしょうか。

実は、今日来るにあたって、このままだと抽象論議がずっと続くのではないかということが先ほど小口委員からありましたけれども、終わってからストレスを感じて家に帰ってもいやだなということで、進行の私案のようなものをつくったのですが、事前に事務局で相談しましたら、ちょっと難しいのではないかというご意見もあったので、いったん配りませんが、何が言いたいかという、やはり個別論議に入りたいと。ただし、再編案をベースにするかどうかというところは、ぜひ議論をしないといけないのですが、個人的には、今日たまたま今井委員からご発言をいただいて、実は前回に宮川委員からのご発言があった、ほんとうに今の学科編成なりが、将来を踏まえたときに、子どもたちのニーズに合っているのかということをベースに、それがいい悪いではなくて、客観的に信頼にたる数値があって、それを結果的にこの3つの地区の合計で計算しても、現実的に白馬のほうか南木曽に通えるわけではありませんから、結果的には当然エリア、エリアという通学エリアを前提にしてのことを考えざるを得なくなるのですけれども、じゃあ普通校が多すぎるとか、例えば先ほどの話では実業科が例えば多すぎるということを、結果やっていくと、では、5.5 がいいかどうかということも踏まえて、それは都市部と地域校というのは違わなければいけないのだということも当然あっていいと思うのですけれども、学科数から、結果学校数というのは必然的に出てくると思います。

今日も提出いただいている、旧第10、第11、第12通学区からほかへの転出、転入ですね。これは、「魅力づけ」をすれば、出て行かずにとどまるのかどうかということも含めて、どういう条件や前提でやれば、じゃあ数が出てくるのか。その数を踏まえて、ではこの学校数が出てきたときに、今のエリアの学科設定が多い少ないを踏まえて、例えば、普通科の高校がこのエリアは多すぎるから減らそうとか、足りないから増やそうとかというのが出てきて、それを現状に当てはめたときに、通学等も踏まえて、ここはそうはいつたってどんなに小規模になっても減らしてはいけないだとか、ここは都市部よりむしろ周辺部の人口が増えているのだから、周辺部のほうを増やしてもいいのではないかとかという議論があっただけいいと思っていました。

仮に、それを1つの案としたときに、今、いろいろいただいたのですけれども、これは個人的な意見になって恐縮ですが、再編案の名前ばかりがクローズアップされています。それはややもすればやむを得ないことかもしれませんが、県の教育委員会も最初から学校名を出したわけではなくて、今申し上げたような何かしらの前提条件を置き、どうあるべきだという、少なくとも私以上に現場を分かっているらっしゃって、将来の子どもたちはこ

うあってほしいという気持ちをもとに、結果出されたものが最終的に当てはめればというステップだとたぶん思います。

そうしたときに、その学校名は別にして、さっき、例えば普通科何%とかいう学科希望というものと同じように、何かしらをベースに検証してきたはずなので、別の検証をするのもいいし、高校名が出るまでの検証ステップをきちんと我々が質問攻めにし、資料も全部出してもらって検証していくということでも、やり方は違っても結果的には同じことをやっていくのかなという気もしています。

そういう意味で、先ほど皆さんのご意見を聞きながら、たたき台をベースにということがあっているのかなという感じでおりまして、総合学科や多部制は先ほど鈴木委員からあったように議論するにしても、どちらが先かは別にして、そんなことをやっていかないと進まないし、学校名ではない検証プロセスの中で、当然魅力というものも検証していくなり考えていくなりということが必ず出てくるのではないかなあと、個人的には思っています。

ただ、親御さんや地域が、それにどこまで入り込めるかというのが少し私は不安を感じるのですけれども、場合によったら、子どもたちのその希望なりが優先されてしまうとかというリスクがあるのかもしれませんが、そんなことをやらないと前に進まないのではないかなということで、一応コピーがあるんですが、これを配ってはいけないということですし、配らない前提だったので人数分枚数がないので、必要ならまた次回ということにしたいと思いますけれど、そんな進め方で、どちらがよいかなんですが。

1 つは、単純に言って、今井委員におっしゃっていただいた学科の希望をベースに検証していったら、それと学科と、学級数と、エリアと、学校というように最初に結びつけていく。もう1 つは、そういった、きっと何かしらの条件を考えながら、単に子どもが減るとか財政だけではなくて、それを考えながらきっと検証作業がされたはずなので、高校名を議論するのではなくて、その検証ステップを我々がなぞるようにやっていったらどうか。説明を求めるといことが主になりますけれども、やっていったらどうかという案。

それ以外に何か、「魅力づけ」を踏まえて具体論に入り込めるような案が、もしあればですが。

多部制・単位制は1 つでいいのか2 つでいいのかというのは、ちょっとまた別の議論が必要かと思います。

いかがでしょうか。

(百瀬副委員長)

今、2 つの案というように言われるが、私としては、あとのほうがいいのではないかなという気がしているのですが。というのは、昨年の検討委員会と同時に懇話会というものがありましたね。あれが5 回ぐらい、各界の代表とかいろんな方が集まって、懇話会というのが5 回ぐらい開かれているわけですね。インターネットで、その記録を見てみたのですが、その第3 回の懇話会、11 月30 日のところに、「職業高校、総合学科、適正配置」という項目がございまして、その中で、そういう学科の適正配置をちゃんと議論しなければいけないという意見が出されているわけです。それが11 月30 日ですから、そのあとの検討委員会の中でも、当然その辺の議論がなされていて、そしてその辺はこの報告書

では、私が読んだ中では見えにくいのですけれども、そういうことも踏まえて再編案というものがつくられて、教育委員会のほうから出されたのではないかと私には思うんですよね。

ですから、先ほど委員長さんがおっしゃいましたそういったものを、また教育委員会のほうから示していただくようなことの中で、議論をしていけばいいのではないかと。そうしないと、またゼロからの議論をするような形になっていってしまいます。今までの、そういう検討委員会なり懇話会なりの議論の積み重ねというものがあるわけですから、そういうものを踏まえて、私どもはどうすべきかということを検討していけばいいわけですよ。ぜひ、そんな形で進めていくべきだと思います。

私は、懇話会のその第3回の記録を見ました。第5回まで全部をインターネットで見ることができますので、委員の皆さんに見ていただければと思いますが、もし事務局のほうでコピーでもしていただければ、そしてなるべく次回の会議のときというよりも、事前に配布していただければ、今までどういう議論があったのかというようなことが、ひとつのベースとして、私どもが共有できるのではないかと感じます。

それをちょっと付け加えさせていただきましたけれども、そのように思います。

（中條委員長）

学科のあるべき姿や、それから補足させていただければ、今日ご説明いただいた我々が求めた学科別の実態というか、子どもたちの実態、希望に合っているかどうかというこのアンケートも、検討委員会に反映させるためのアンケートだというご説明でしたので、そういう意味では、そういうことをどこまで反映したかは別にして、そういったものを踏まえての再編案であるはずなので、そういう再編案をベースに議論を進めていったほうがよろしかろうというご意見だと思います。

ほかにございますか。それでよろしいでしょうか。

ほかに、もっと「魅力づけ」の論議をすべきだとか、ジョイント校なり連携校なりをもっとやるべきだとか、ご意見が当然あってしかるべきだと思いますので、ほかにご意見があれば、ぜひお願いしたいと思います。

では、1点ちょっと気にかかるのは、どのタイミングでというのが、次回からがベターかベストか分かりませんが、校名論議は別にして、第2回の再編案についての説明を求められたときに、事務局から実際にご説明をいただいたのですが、当然その数字的なものを含めて、背景、理由はあります。ただし、それを出すタイミングをきちんと考えていかないと、それがややもすると、一人歩きという言い方ではなかったかもしれませんが、この推進委員会の議論なりを誘導してしまうリスクがあります。従って、我々はそのタイミング、必要なときにそれをきちんと出していただきますということで、第2回は確認をいただいたのですけれども。

高校名は別にして、今幾つかご意見をいただいたようなことをベースに、検証ステップとして説明をいただくということは可能ですか。

(吉江高校教育課長)

具体的な校名と合わせないと、なかなか難しいと思います。ある意味で、仮にそういう話だとしますと。

確かに、委員長さんがおっしゃられましたように、私が第2回のときに、申しましたが言ってしまうと、言えば言うほど議論を縛ってしまうのではないかなというような気がいたしましたので、あまり具体論についてご説明はというようなご意見を申し上げたのですが、例えば先ほど来お話がある中で、議論をいただきますときに、それぞれの地区ごとにいろんな検討をいただく場面が今後できるとすれば、そういう場面の中で、個別の案件ごとのお話を申し上げたほうがより進むのかなという気がしております。

(中條委員長)

再編案で学校名を出すとして、例えば大町と大町北を統合する、それから、「てにをは」をどっちに付けるかは別にして、木曽山林と木曽を統合するという、なぜ木曽か、なぜ木曽山林か。なぜ大町か、なぜ大町北かではなくて、なぜ大町地区の、もしくは木曽地域の、それは木曽地域と大町地域は最初から前提にしたのではなくて、新しい第4通学区という中で、例えば、通えるのか通えないのかということも含めて、当然検証がされているはずですよ。例えば、私は、さっきの2年生というのも少しひっかかるし、数字で単純に計算していいのかなという客観性なりというものの検証も気にはかかるのですが。

例えば、それを前提にしたときに、幾つか条件をつけないと計算ができないですね。その条件は、例えば、他通学区との出入りはどうするか、私立の入学者は現状を前提にするのかどうか。それから、通学エリアの配慮というのはどうするのだとか、総合学科、多部制というのは、さっきはありましたけれど、1校でいいのかどうかとか。

また、出生率も、単純に0.6掛けるなどの減少率でやるのではなくて、例えば、塩尻市と、木曽とか大北とか、エリアによって出生率は違うはずなので、一律で見えていいのかとか。その辺は私が知らないだけで、すべて何かしらの前提を置いて検証をして、結果このエリアの17年後、平成31年の生徒数はこうなるだろうというのがたぶんあって、それをどのように割り振るのかにあたっては、歴史も踏まえながらかもしれませんが、必要な学科数というのもあるって、それを現状の高校に当てはめたときにはということがあって、次に高校名が出てくると思うんですね。その高校名が出てくるまでの検証ステップというのをご説明いただく、もしくは解説いただく。前提条件を示して、例えば、単純に何かを入れたら答えがぽっと出てくるのではなくて、数式なり公式なり方程式なりがあって、それがあって初めて答えが出てくるという、その答えではなくて、その式をみんなで検証しましょう。そうでないと答えも検証できないのではないかなという意味なんです、それはやはり、最初からA校ありき、B校ありきということで説明なり議論をしないと理解は難しいということなのではないでしょうか。

(吉江高校教育課長)

今、委員長さんが確かにおっしゃられた面と相通じるところがあるかと思うんですが、私どもは、基本的には、この第4通学区でいきますと、旧第10通学区から第12通学区までのそれぞれの地区ごとのエリアの中で、学校における生徒数の増減というようなものを



見ても、これはもう第1回目の推進委員会に出した資料がある意味でベースになっていまして、このようなベースを考えた場合にどうなっていくんだというようなことをやっていますので、そういう意味で、結果論的なイメージがどうだということになりますと、これまでお出しした資料、例えば今回「第4通学区における中学生の動向」もお出ししていますが、これも1つのデータの根拠になります。

これが前の委員会におきましてお出ししましたような、それぞれの通学区ごとの状況というようなものは、もちろんありますが、それは個々の一般論として出されているのはいいのですが、あるいは、個別の、例えば第10通学区であればどう、第11通学区であればどうというような議論をしたほうがいいのかということ、恐らくは、個別の議論をしたほうがしやすいのかなというような気もしています。

（中條委員長）

具体的な高校名ではなくて、最初は第4通学区でいいのですけれども、第10、第11、第12、10から11へ、11から別の旧通学区へという出入りも踏まえて、どうなるのか。それを踏まえたときに、将来の学科編成はこうあるべきというものが何かあって、それがいいのか悪いのかという、子どもたちの希望に合っているのかということも、きちんと検証がなされて、その上でのステップだと思うんですね。

そういう一般論ではなくて、第10、第11、第12通学区というような限定で構わないのですけれども、いろんな検証をステップごとに出していただいて、そこでの「魅力づけ」も踏まえながら、最終は我々として何かしらの、A校なのか、B校なのか、C校なのかという、それが同じなのか違うのかということというのは、また別の議論が必要だと思いますけれども、やるということは可能かどうかなのだと思います。

第10、第11、第12というような、できるだけ校名に至らず、かつある程度エリアを限定すれば、それはできるという理解でよろしいですか。

もし無理なら、さっき今井委員が言ったのと私もまったく同じなのですが、今日の資料2でしたか、普通科何人、工業科何人、農業科何人、それぐらいしか使えないので、平成31年の生徒数は出ていますから、それで単純にぶっつけたときに、例えば、第10、第11、第12通学区の、現状の学級数、それから県教委が想定された平成31年の学級数とを比較検証して、「普通科は多すぎる」とか「この実業科は多すぎる」とか、実業科の数が何学科必要だったら、では通える通えないがあるので、例えばこの第10通学区、第11通学区、第12通学区には工業科は何科が必要だね、商業科は何学科必要だね、何クラス必要だねということで、今の案と比較検証することはできますよね。

ただ、それをもって、このデータを使うことは非常に危険でしょうか。あるスポット4,000人足らずの2年生の、その瞬間、瞬間の希望だけをもって、将来の17年後を決めていいのか。それはあると思うのですけれども、何かしないと進まないと思いますが。

（柳澤教育主幹）

学科の配置につきましては、『最終報告書』の19ページに専門高校のことについて触れられていますが、そこに長野県と全国の専門学科、普通科、総合学科等の比率が、在籍数でグラフになっております。

この学科の配置につきましては、検討委員会の中でも、どういうエリアに、どういう学科を、幾つ配置していくという細かい論議はしてきておりません。つまり、どういう学科をどこにどう配置していくかということについては、それぞれの時代によっても違いますし、それから、それぞれの地域のニーズによっても違うということもございますので、必ずしも、その学科比率をどのようにしていったらよいか、といったような細かい論議はなされております。

この再編整備案の一番のベースになっておりますのはやはり生徒数の動向でございます。

（中條委員長）

すみません。解説をいただく必要はなくて、できるかできないか。今おっしゃられたことも含めて、さっき言ったような検証を、要は、つくられたのと同じように、我々がその魅力なりを踏まえて検証をしていく結果、数の論議にもつながり、最終的にはエリア、エリアで、何校、何学科必要なのかというところにもつながっていくのではないかということなんですけれども。もう時間もないので、我々が検証をできるかできないかをおっしゃっていただきたいのですけれど。無理だという理解でいいのでしょうか。

（今井委員）

今の話だと、要はあの4校の案を出したというのは、将来の人口動向にあって決めたという説明にしか聞こえなくなってしまうんですよ。

これは非常にまずいのではないかと。

（中條委員長）

なんですけれど、それだけでは絶対ないと思うので。

（今井委員）

今の説明だと聞こえちゃいますよ。

（小口委員）

もしそうだとするならさっきからの話を付け加えないといけません。

（今井委員）

それだとまずいから、いろんな、もうちょっとほかの、3つ、4つの要素を見て、「でも、やはりそういう結果になったね」というなら、それならしょうがないんですよ。

でも、現実には、それって違うと思いますよ。

もうちょっと言わせてもらっていいですか。

例えば、この表を見ると、資料2番の1ページのところにある農業科というのを見ますと、アンケートについては、生徒は2.5%の比率しかない。だけど、募集定員はその3倍に近い6.4%あるんですよ。その結果が、こちらのさっきの資料5になってしまうんですよ。要は、極端なことを言いますと、学校に定員があるから、農業科しか行けなかったか

ら行ったと。

私は、これはそうじゃないと思います。本来はそういうところをちゃんと論議して、学科の数なり、高校の数というものは決めていかなければいけないのでしょう。

（吉江高校教育課長）

例えば、この第四推進委員会におきましては、基本的に、この言葉がいいかどうかは別として、普通科が大事だというようなイメージで、今までもちょっと議論が出ているかと思っています。

ただ、ほかの委員会におきましては、逆に専門高校をもっと維持すべきだというような意見をいただいているところもあります。その委員会の中では、これは改めてお出ししますけれども、ある委員さんの中から、専門高校に希望された生徒さん、例えば工業高校を希望された生徒さんは、2次希望も工業高校であったというような資料も出ているところもございます。

その辺が、実は今回、私が申し上げましたように、平成15年度におきましては、3年生と2年生のアンケート調査というようなものを実施しましたが、これがイコール、必ずしも最終の希望に沿ったものでは必ずしもないというような難しさがあるのは事実です。その辺は、ご認識いただきたいところなのです。

それとは別に、今お話いただきましたような細かいような話の中で、段階的にどうのこうのというような話の資料というようなことで、どの程度までお示しできるかは別として、次回以降、例えば、まず総合学科とか、多部制・単位制について議論をいただくというようなお話。あるいは、各地域ごとに議論をいただくというようなお話。その辺の方向性をお決めいただければ、また委員長さんと相談しまして、ある程度今までいただきましたご意見を踏まえた内容で調整して、できるだけ資料をご用意しまして、改めてお示しするというところでお願いしたいと思っております。

（中條委員長）

なぜこうなったかの説明を我々はほしいのではなくて、どうしてこのように至るかというステップを検証していきたいのですね。それは、出してはいけないと言えばそれまでのだけれど、きっと同じようなことを考え、悩み、子どもたちの将来をおもんばかって、たぶんやってきているはずなんです。

そのときに、ではエリアの出入りをどうしようかと、いろんな前提条件を決めないと数が出てこないということも当然ありますし、それを自分たちがやるとなると、資料がない、現場もよく分からないという中では、まったく違ったものを出してはいけないので、一番分かって、かつ同じような作業をされてきたのであれば、最後の答えはあとでみんなで議論をすればいいので、そのステップを我々が個別にやるのではなくて、もう1回同じことを繰り返すことによって、検証させてくださいと。

例えば、さっき今井委員からあったように、「学校の希望というのが入っていないのはおかしいじゃないか」と、もしかしたら入っているかもしれないのですよね。だから、そこをやはり検証していった上で、あるべきの個別論議に入っていけないといけないのではないかなということだと思いたいますが。

次回、すぐに間に合わなければ、それは、先ほどもご意見をいただいていますけれども、多部制と総合学科については、ありきではなくて、プラスもマイナスも含めてかもしれませんが、かつエリアに絞らずに、第4通学区という視点から、ただそのときに、最初はどうしても通えないというところをどう配慮していくのかということも考えなければいけないと思いますけれども、このような形でやって、それからステップ、ステップで、1回で終わるとは思っていませんけれど、やっていけばいいのかなと思っていますけれど、そんなまとめでいいですかね。

（吉江高校教育課長）

ええ、分かりました。

それで、また改めて資料につきましては、再度委員長さんをご相談申し上げたいと思うのですが、先ほどいただきましたようなステップを踏んで議論するとなればなおのこと、ある意味で、少しそれぞれのエリアごとの議論をしていただく段階においてのほうが、私どもとすれば説明しやすいのではないかと考えています。

（中條委員長）

エリアごとのどういう議論ですか。

（吉江高校教育課長）

ですから、先ほどのようなお話だといいますと、それぞれのエリアによって、この地域はこういう現状だから、こういうふう考えたというような議論をある程度展開せざるを得ないと思うのです。当然出入りも考えなければいけません。それは、第4通学区全体の出入りではなくて、それぞれの旧通学区ごとの出入りの中で議論しなければいけないと思っています。

その辺を考えた場合に、今のような形で、一般論としましてどういうことを考えたということでお示しするとすれば、一般論としても非常にアバウトな内容はお出しできると思います。ただ、もう少し細かい数字的なものも含めてという議論になれば、個々の地域ごとにお話を申し上げるのが一番しやすいのかと思っています。

（中條委員長）

第10通学区と第12通学区を、一緒には議論できないと思っていますが。

「第12通学区は」という、それは当然区切らないと、小谷のほうが南木曽には入れませんから。それに、当然前提条件をつけて、通学できるできないを、ちゃんと考えてなされているはずですね。

反対論があれば、当然それに固執しませんし、もちろん強制もしませんので。

次回に即は無理そうですから、今回は、先ほど鈴木委員からあった意見を代表させていただいて、総合学科と多部制の議論をさせていただいて、それが確かに数に結び付く部分もあるのですが、次回もしくは次々回に、もう少し詰めさせていただくなり、それから次回にあるのであれば、今回は今はまだ見えない部分がありますので、それを紹介させていただく中で、できないものはできないということになっているかもしれませんが、可

能性があるかどうか、どういう進め方ができるのかを、皆さんの意見を聞きながら進めさせていただきたいと思います。

では、延びてしまって申し訳ありませんでした。

次回について、すみません、事務局からご案内をお願いいたします。

（西牧主任教育支援主事）

では、よろしくお願いします。

回りの日程につきましては、8月12日、金曜日の午後。それからその次ですが、8月28日の日曜日の午後を目途に考えております。また、委員長さんともご相談の上、改めてご案内申し上げたいと思いますので、よろしくお願いします。

併せまして、9月と10月の日程確認表が配られていると思いますが、またご都合の悪い日に「×」を記載して、ファックスで送っていただきたいというように思います。

よろしくお願いします。

（中條委員長）

12日の会場候補は、まったく未定ですか。

（西牧主任教育支援主事）

8月12日の会場につきましては、一応、松本の合同庁舎を予定しております。

（中條委員長）

合庁ですか。はい、分かりました。

では、もしまた変わるようであれば、通知等でご案内いただくようお願いいたします。

（百瀬副委員長）

この締め切りは、いつごろで。

（西牧主任教育支援主事）

できれば、8月上旬にいただければと思いますが。

（中條委員長）

それでは、次回、ほんとうにお盆前ということで恐縮ですけれども、8月12日のこの時間帯でよろしいですね。1時半から4時半という前提で。

（西牧主任教育支援主事）

時間につきましては、また改めてご連絡をさせていただきたいと思いますが、現時点では一応午後ということをお願いしたいと思います。

(中條委員長)

はい。では、12 日午後、取りあえず案は松本合同庁舎ということで予定されるという前提ですので、また、よろしくお願いします。

あと、何かございましたら。よろしいでしょうか。

以上をもちまして、第 4 回の推進委員会を終了いたします。